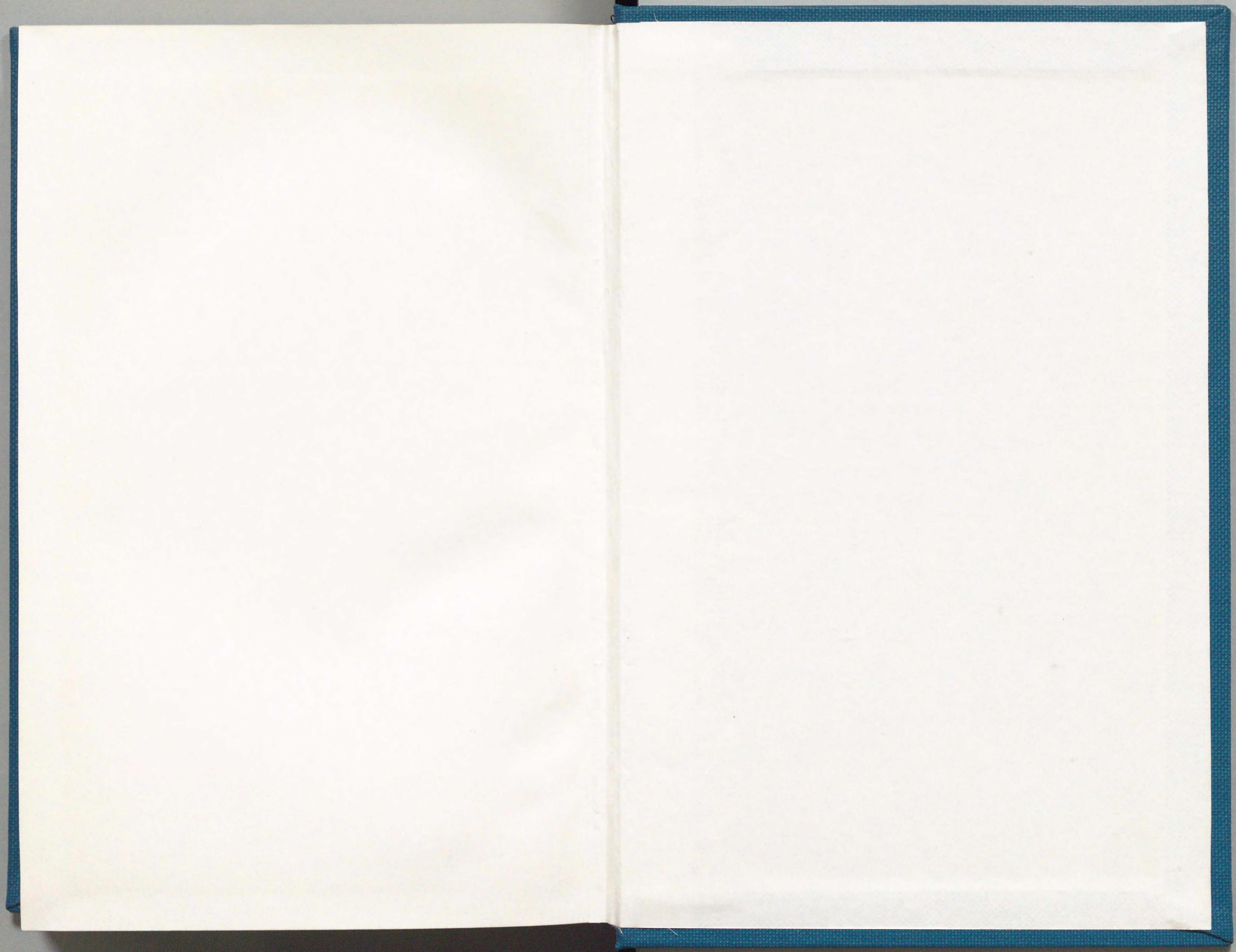
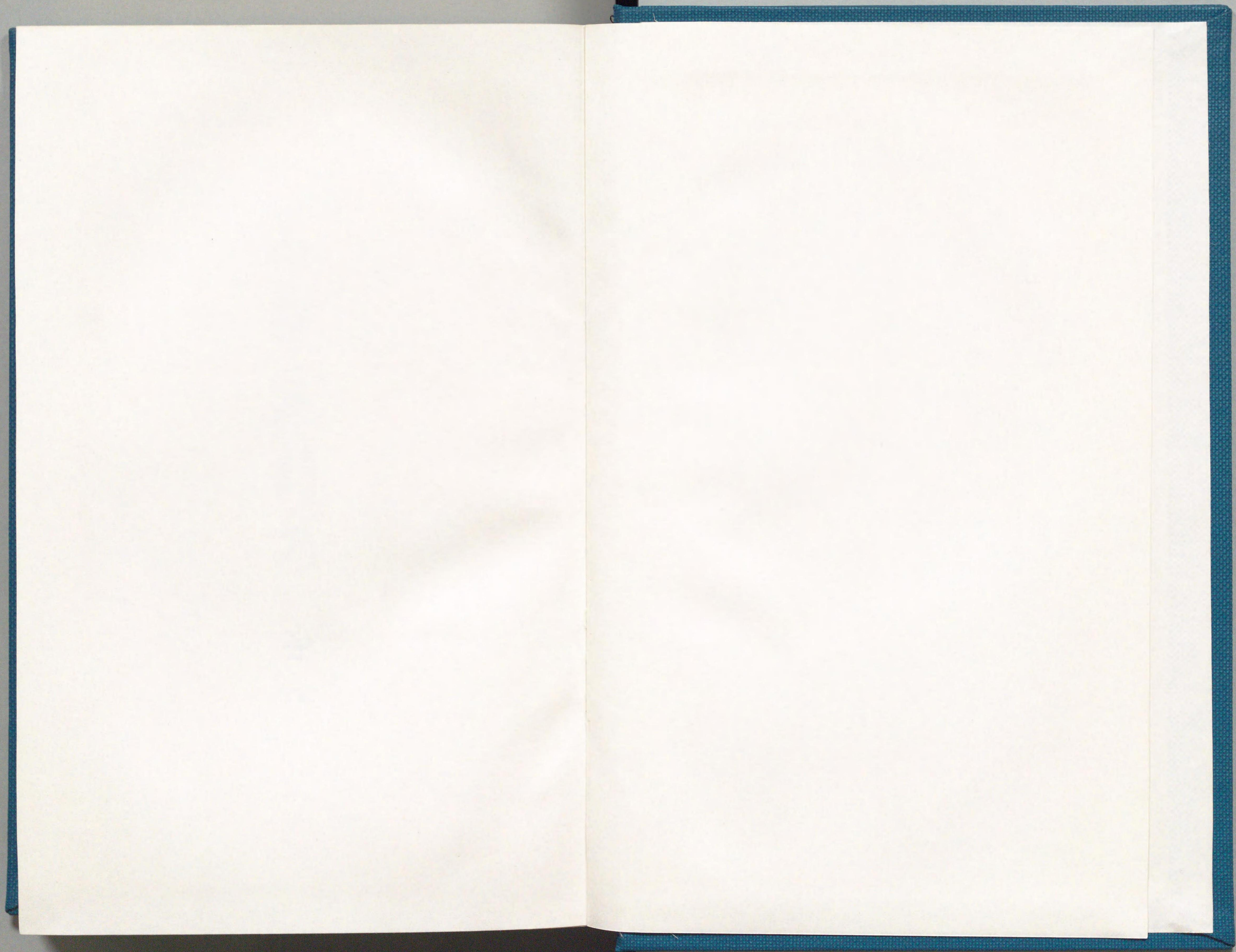


911.12
1442m



00247636





213086

萬葉集新考

中



911.12 I442 m



247636

圖版解説

本居宣長書。料紙唐紙。縦一尺強。横一尺六寸

五分

譯文

たなつ物百の

本草も天照す

日の大神のめ

ぐみえてこそ

朝よひに物喰

毎に豊うけの

神のめぐみを

思へ世の人

宣長

前の歌は内宮即皇大神宮、後の歌は外宮なた、

へ奉つたのであるが共に玉銚百首の中に出て居

る。此百首の中の歌は往々かやうに眞假字即萬

葉假字で書いて居る。常の假字で書いたものも

無論ある。余は

日神の本つ御國之皇國はし百八十國の泰國お

やぐに

と書けるものを持つて居る

多那都物百之
 木草母天照須之
 日乃大神之米
 具美延互許曾
 朝與比尔物喰
 每尔豊宇氣能
 神乃米具美袁
 思閉世之人
 宣長

凡例

漢字のみにて書けるが萬葉集の原文にて假字がきにせるは譯文なり
原文は寛永版本に依りたり。但誤字なる事明白なるものは指摘の煩を
避けて直に改めたる處あり。又俗字を正字に改めたる處あり
譯文中傍訓を施したるは諸家(特に略解古義)の訓の一定せざりし處と、
諸家の訓を斥けて余が新に訓ぜし處と、讀者が讀み悩み又は讀み誤る
べき恐ある處となり。その別は註解を讀まばおのづから明ならむ
歌の中に□を以て圍めるは衍字、即宜しく除くべき字
字間に△を挿みたるは脱字又は脱文ある處
字の左傍に小さき△を附したるは誤字
字の右傍に△を附したるは注意すべき字なり
又歌の中に()を以て括したるは枕辭なり

萬葉集新考第四

目次

卷十

春雜歌	一九〇五頁
春相聞	一九四九頁
夏雜歌	一九八一頁
夏相聞	二〇〇八頁
秋雜歌	二〇一八頁
秋相聞	二一六一頁
冬雜歌	二二〇〇頁
冬相聞	二二二〇頁

目次

一

倒置の枕辭(附録)……………二二二二三頁

卷十一

旋頭歌……………二二二二七頁

正述心緒(柿本人麿歌集之歌)……………二二四四頁

寄物陳思(柿本人麿歌集之歌)……………二二七四頁

問答(柿本人麿歌集之歌)……………二三三七頁

正述心緒……………二三四四頁

寄物陳思……………二四〇〇頁

問答……………二五一八頁

譬喩……………二五二八頁

流布本卷第十至卷第十一目錄……………二五四一頁

萬葉集新考卷十

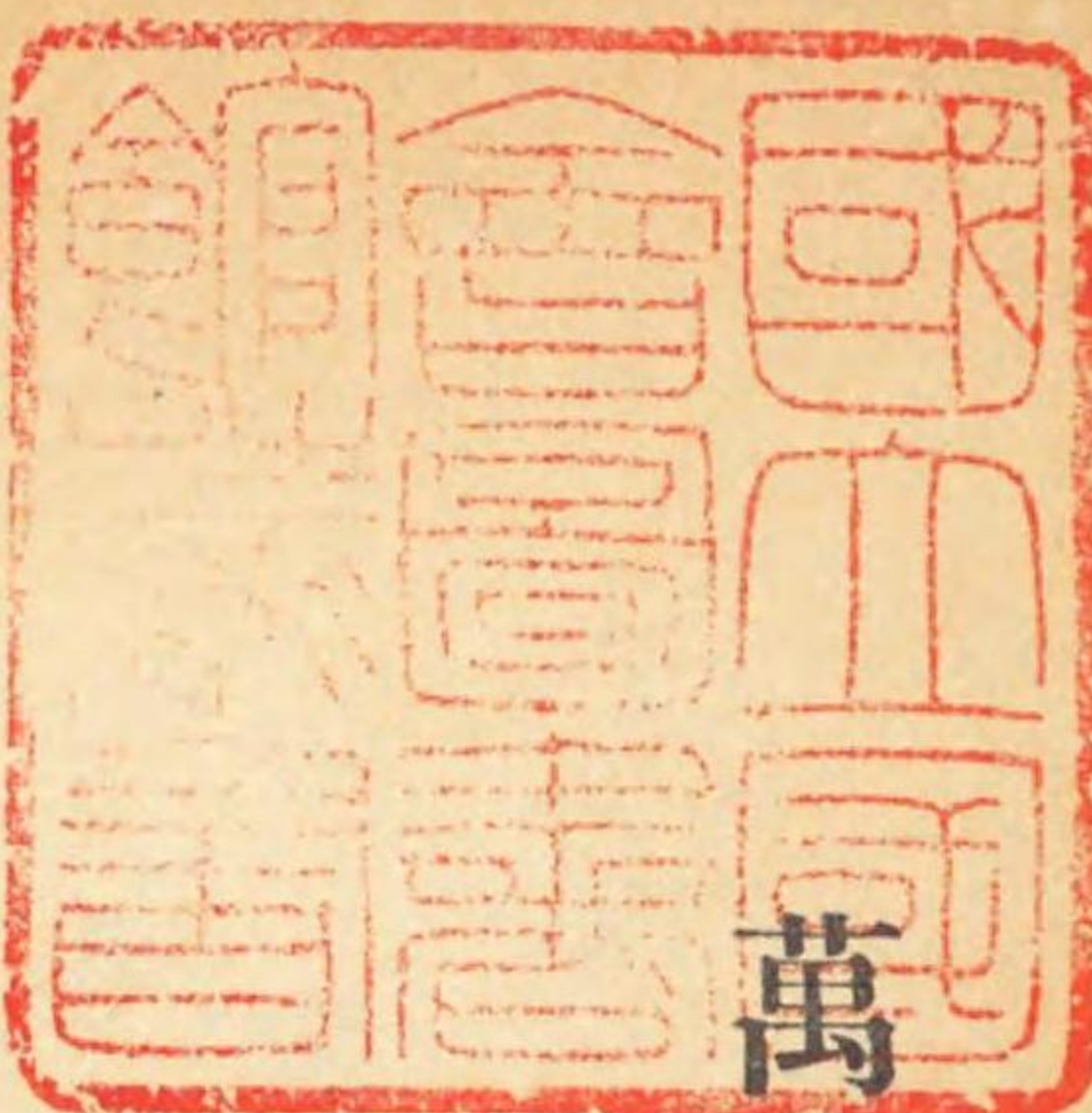
井上通泰 著

春雜歌

此部にはまづ無題歌七首を載せさて次々に詠鳥、詠雪、詠霞等を收めたり。その冒頭の無題歌は皆霞をよめる歌なれば詠霞三首と一つにして詠霞十首とすべきをさはせざるはいかなる故にかとは誰も訝る所なるべし。現に古義には

總標に春雜歌とあるは下の旋頭歌、譬喩歌とあるまでを總たれば今の七首の題詞別に擧ずしては足はず。春相聞もをはりの問答十一首までの總標なればはじめの七首別に題を擧べきに舊本になきは足はず。秋相聞の下の相聞五首、冬雜歌の下の雜歌四首、冬相聞の下の相聞二首みな此に准ふべし。さて今この七首はみな霞の歌なるを下に詠霞三首といへると別てるは所由あるにや

といひて通本に附屬せる目錄に従ひて七首の題辭として雜歌の二字を補へり。案



ずるに冒頭に無題歌を載せたるは此部の外春相聞、秋相聞、冬雜歌、冬相聞にして其歌は皆人麿歌集に出でたる歌なり。さればこは本集の編者がことさらに類を分たずして各部の首におけるにてもし題辭を補ふべくは左註を移して柿本朝臣人麿歌集所出歌と標すべきなり

○

(久方)天のかぐ山このゆふべ霞たなびく春たつらしも
久方之天芳山此夕霞霏霰春立下

第四句にて切りて心得べし

卷向の檜原にたてる春霞おほにしもはばなづみ△米やも
卷向之檜原丹立流春霞鬱之思者名積米八方

上三句はオホニにかゝれる序にてそのオホニは尋常ニなり。ナヅムは物に妨げらるる事にてやがて艱難する事なり。○こは戀の歌なり。○米の上に来をおとしたるか

いにしへの人のうゑけむ杉枝霞たなびく春は來ぬらし

古人之殖兼杉枝霞霏霰春者來良之

第四句にて切りて心得べし。杉枝とあるは杉村の誤ならむ。卷三(五一四頁)にもイソノカミフルノ山ナル杉村ノとあり。○略解に

古へノ人ノウエケンとは只年經たるをいふのみ

といへれどもし天然林ならばたとひ年經たりともイニシへノ人ノウエケムとは云ふべからず。殖林のはやく神代より行はれし事は日本紀に見えたり

(子らが手を)まきむく山に春されば木葉しぬぎて霞たなびく

子等我手乎卷向山丹春去者木葉凌而霞霏霰

子ラガ手ヲはマキにかゝれる枕辭なり。マキムク山ニはカスマミタナビクにつづけるなり。春サレバにつづけるにあらず。木葉シヌギテは木葉ノヒマヲ貫キテとなり。略解に「常葉木ノ葉ノアハヒマデモの意なり」といひ古義に「木葉の處を凌ぎ奪ひ吾處として押なびけて」など釋せるは其によろしからず。○卷向山は初瀬山の西につ

づけり

(玉蜻^{タマカギル})夕さりくれば(さつ人の)ゆつきがたけに霞たなびく

玉蜻夕去來者佐豆人之弓月我高荷霞霏霰

玉蜻はタマカギルとよむべし。カギロヒノとよむは非なり(二九三頁参照)○ユツキ
ガタケは卷七(一一三三頁)にマキモクノユツキガタケニとあり

けさゆきてあすは來牟等云子鹿丹^{イヒテ}あさづま山に霞たなびく

今朝去而明日者來牟等云子鹿丹且妻山丹霞霏霰

略解に來牟等の下の云を第三句に附けてアスハキナムトイフコカニとよみたれ
ど、さては何の事とも聞えず。古義には云を上ニ附け子鹿丹を愛也子の誤としてア
スハコムチフハシキヤシとよめり。案ずるに子鹿を手去の誤とし丹を衍字として
(元曆校本には丹の字なし。されば且妻山丹の丹をかきおとしたりと思ひて、誤りて
第三句の次に書入れたるにてもあるべし)アスハキナムトイヒテユクとよむべき
か○山の名のアサヅマが朝ノ夫^{ツマ}といふに通ずればケサユキテ明日ハ來ナムトイ

ヒテユクといふ序を設けたるなり。今朝旅立チテ明日ハ歸來ムとなり。朝妻山は大
和國南葛城郡葛城村の大字に朝妻あるそれなるべし。卷五(九四四頁)にもケフユキ
テアスハキナムヲナニカサヤレルとあり。又司馬相如の長門賦に言我朝往而暮來
兮とあり○且は且の誤なり

子らが名にかけのよろしき朝妻の片山ぎしに霞たなびく

子等名丹開之宜朝妻之片山木之爾霞多奈引

右柿本朝臣人麿歌集出

このアサヅマは妻の意にとれり○子ラガ名ニは妹ノ名トシテなり。カケノヨロシ
キは懸クルニ宜シキにてそのカクルは口ニ唱フルなり。卷一(一二頁)にも
たまだすきかけのよろしく、とほつ神、わがおほきみの、いでましの、山こす風の云
々

とあり○片山岸は山の斷崖なり、開は關の誤なり

詠鳥

（うち霏^{ナヒク}）春たちぬらし吾門の柳のうれにうぐひすなきつ
打霏春立奴良志吾門之柳乃宇禮爾鷺鳴都

霏は靡の誤か

梅の花さける崗邊に家をれば乏しくもあらずうぐひすのこゑ
梅花開有崗邊爾家居者乏毛不有鷺之音

イヘラルは一つの動詞なり。略解に「イヘキシヲレバを略ける古言の例也」といへる
は妄なり。意は家居スルといはむに同じ。トモシクモは少クモなり

春霞流るる共に青柳の枝啄持^{トリモチ}而^{シテ}うぐひすなくも

春霞流共爾青柳之枝啄持而鷺鳴毛

春霞ナガルルは春霞タツといはむにひとし。本集には空より物の降るをナガルと
いへり。ナガラフル雪フク風ノ（一〇二頁）アメノシグレノナガラフミレバ（一二六頁）
アメヨリ雪ノナガレクルカモ（八九八頁）ナガラヘチルハナニノ花ヅモ（二四八四頁）
などいへるを見べし。〇共は略解に従ひてナベとよむべし。初二の意は霞ノタツ折

カラとなり。〇第四句を従来エダクヒモチテとよみたれど枝をくはへては鳴かれ
ず。枝取持而の誤にて枝ニトマリテの意ならむ

わがせこを莫^{ナク}越^{チカ}山^{ヤマ}のよぶ子鳥君よびかへせ夜のふけぬとに

吾瀬子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀬夜之不深刀爾

第二句を舊訓にナコシノ山ノとよめるを契沖は

第三にサザレ浪イソ越^{ヒコ}道^{ミチ}ナルとよめるは巨勢路なれば今も巨勢山を云ふとて

かくはよそへたるにや

といひ略解には訓を改めてナコセノヤマノとよみて「大和の巨勢山をナコセとい
ひかけたり」といへり。案ずるにワガセコヲのヲを卷七なるワガセコヲコチコセ山
ト人ハイヘドのヲとおなじくヨの意とせば莫越山はナコシノヤマとよまざるべ
からず。又ワガセコヲ莫^{ナク}までを巨勢山にいひかけたる枕辭とせば莫越山はナコセ
ノヤマとよまざるべからず。従ひてワガセコヲのヲを常のヲとしコセを令越の意
とせざるべからず。しばらく後者に従ふべし。〇結句のトニについて契沖は

時ニなり。時ニを略してトニとよめるは繼體紀に勾^{マカリ}大兄^{オホエ}皇子のウマイネシトニ

とよませたまへるもウマ寢宿シ時ニなり。此集にもあまたよめり。第十六爲鹿述痛作歌に塩漆給時賞毛とある時は和語を下略してトといへり

といひ、宣長は古事記穴穂宮の段に未日出之時とあるをイマダヒモイデヌトとよみ、さて

この時は刀爾と訓べし。書紀繼體卷、歌にウマイネシトニ、萬葉十に夜ノフケヌトニ、十五にコヒシナヌトニ、十九にサヨフケヌトニ、廿にワガカヘルト禰などあり（これらの刀を時の略と心得るは非ず。此は俗言に夜ノ更ヌウチニなどいふウチニと同意にて外ニなり。其を俗に内ニといふは此方を内にし彼方を外にして云言、外ニと云は彼方を内にし此方を外にして云言にて意は同じ。行を來と云も通ふが如し。此は既に日出たる後を内にして未出ざる前を外とは云なり）

といへり（記傳二三四九頁。案するにトニは契沖のいへる如く時ニなり。但處によりては程ニと譯すべし。いにしへは時をも處をもトといひけむ。さて之を相分つとて時にはキを添へてトキといひ處にはコロを添へてトコロといひしならむ。今は夜ノ更ケヌ程ニと譯すべし

朝井代爾アサノイきなくかほどりなれだにも君にこふれや時トキ不終ツクナクなく

朝井代爾來鳴アサノイ杲鳥汝谷文君丹戀八時不終鳴

初句は眞淵が井を戸の誤としてアサトデニとよめるに従ふべし。代をテとよむべき事は卷七（一三一五頁）にいへり。○古義に「來ナキシといふべきを來ナクといへり」といへるは非なり。○時不終を從來トキヲヘズとよめり。さて略解に「鳴やまずして頻になくをいふ」といひ古義に「止時なく頻りに鳴と云むが如し」といへれどトキヲヘズとよみて時ヲ終ヘズの略とせむに鳴止マズなどいふ意にはなりがたし。案するに卷六（一〇七一頁）に

湯の原になくあしたづはわがごとく妹にこふれや時トキ不定ツクメナク鳴とあり下にも

ひぐらしは時となけども於△戀コイたわやめわれは△不定ツクメナク哭

とあれば今も時不定鳴などありしを誤れるならむ。さればトキワカズナクとよむべし

（冬フユごもり）春ハルさりくらし（あしひきの）山にも野にもうぐひすなくも

冬隱春去來之足比木乃山二文野二文鷺鳴裳

ナクモは今のナクヨなり

紫の根ばふ横野の春野には君をかけつつ鶯なくも

紫之根延横野之春野庭君乎懸管鷺名雲

紫は草の名横野は河内の地名とも上野の地名ともいふ契沖はムラサキノ根バフを横の枕辭としたれど枕辭にはあらず横野の形容辭なり根バフは蔓る事なり横野ノ春野は即春ノ横野なり○ニハのハはただ軽く添へたるにはあらざれど古義に『他所ハシラズといふほどの意なり』といへるばかりは重からず○カケツツは心ニカケツツなり

春されば妻を求むとうぐひすの木ぬれをつたひなきつつもとな

春之去者妻乎求等鷺之木末乎傳鳴乍本名

ナキツツモトナはアヤニクニ鳴キ鳴キスルヨとなり妻をこひしみをるにあやにくに鷺の妻を求むる聲がするよといへるなり

春日なる羽買の山ゆさほの内へなきゆくなるはたれよぶ子鳥

春日有羽買之山從猿帆之内徹鳴往成者孰喚子鳥

サホノ内は卷六一〇六五夏にも佐保ノ内ニアソビシコトヲ宮モトドロニとあり當時佐保の郷内をサホノウチといひなれしならむ齊明天皇紀に皇孫建王タケルを今城谷上ノに葬りし後に天皇の悲しみて口號したまひし御歌にオモシロキイマキノ再知ハ、ワスラユマシジとあるウチと同例ならむ古義に佐保山の内と釋けるは従はれず

答へぬになよびとよめそよぶ子鳥佐保の山邊をのぼりくだりに

不答爾勿喚動曾喚子鳥佐保乃山邊乎上下二

契沖いはく『同じ作者の上と二首にて意を云ひ盡せるなるべし』と初句は喚ビテモ誰モ答へヌニとなり○山邊は川邊の誤ならむ山邊はノボリクダリといはむにふさはしからざればなり

(梓弓)はる山ちかく家居イヘアラシ之つぎてきくらむうぐひすのこゑ

梓弓春山近家居之續而聞良牟鷺之音

家居之を舊訓にイヘキシテとよめり。契沖は之に従ひて「之の下に氏等の字あるべし」といひ宣長は「之は者の字を誤れるなり」といひてイヘヲレバとよみ雅澄はイヘヲラシとよみて「家居ヲシタマヒテと云ほどの意なり」といへり。案ずるに古義の如くよむべし。宣長の如くイヘヲレバとよみて己が事とせば第四句はツギテキキナム又はツギテキクベシといふべく聞良牟とはいふべからざればなり。さてイヘヲルは家居スルといはむにひとし。上(一九一〇頁)にもウメノ花サケルヲカベニ家ヲレバとあり。それを今は人の上なれば家ヲラシといへるなり。ツギテキクラムは現ニ打續イテ聽キタマフラムとなり

(うちなびく)春さりくれば小竹之米丹尾羽うち觸てうぐひすなくも

打靡春去來者小竹之米丹尾羽打觸而鷺鳴毛

契沖は第三句の米を末の誤としてササノウレニとよめり。現に類聚古集に末とかけり。されば契沖の説に基づきてシヌノウレニとよむべし。集中に小竹をササともよめれど。古義は舊訓に従ひてシヌノメニとよみて小竹之群の義としたれど従は

れず。尾羽ウチフリテは尾ト羽根トヲ小竹ノ末ニ觸レテとなり

朝霧にしぬぬにぬれてよぶ子鳥三船の山ゆなきわたるみゆ

朝霧爾之怒怒爾所沾而喚子鳥三船山從喧渡所見

シヌヌは後世のシトトなり。但古義に

シトトはもとこの之怒怒をシトトと訓誤りたるより出來たる詞なるべし。怒字にはトヌの兩音あればなり。されど集中にはヌの假字にのみ用ひてトには用ひざる例なるを委く考へざりしものなり

といへるは非なり。シヌヌがシノノに轉じ更にシトトに轉せしなり

詠雪

(うちなびく)春去來者しかすがにあま雲霧相雪はふりつつ

打靡春去來者然爲蟹天雲霧相雪者零管

通本に題辭を脱せり。今補ひつ

霧相を略解にキラフとよめるは非なり。古義の如くキラヒとよむべし。キラヒはク

モリテなり。シカスガニは然モなり○第二句を從來字のまゝにハルサリクレバとよみたれど、さては一首と、のはず。者を衍字としてハルサリニケリとよむべし

梅の花ふりおほふ雪をつつみ持君にみせむと取れば消つつ

梅花零覆雪乎褻持君爾令見跡取者消管

梅の花さきちりすぎぬしかすがにしらゆき庭にフリシキニツツ零重管シキリツツ

梅花咲落過奴然爲蟹白雪庭爾零重管

第二句のサキは軽く添へたるのみ。第四句の調なつかしからず。結句は略解に従ひてフリシキニツツともよむべく又古義に従ひてフリシキリツツともよむべし。シクはやがてシキルなり。シキルの例は卷六一〇四七頁にナキズミノ船瀬ノ濱ニ四寸流シラナミとあり

今更に雪ふらめやかぎろひのもゆる春べとなりにしものを

今更雪零目八方蜻火之燎留春部常成西物乎

カギロヒは後世のカゲロフなり。雪フラメヤモは雪フルベシヤとなり。わりなく雪

のふるを見ていへるなり。ハルベは春時なり

風まじり雪はふりつつしかすがに霞たなびき春さりにけり

風交雪者零乍然爲蟹霞田菜引春去爾來

卷八(一五〇〇頁)にも

うちきらし雪はふりつつしかすがにわぎへのそのにうぐひすなくも
とあり

山のまにうぐひすなきて(うちなびく)春とおもへど雪ふりしきぬ

山際爾鷺喧而打靡春跡雖念雪落布沼

フリシクは類ニ降ルなり

をのうへにふり置雪し風のむたここにちるらし春にはあれども

峯上爾零置雪師風之共此間散良思春者雖有

右一首筑波山作

風ノムタは風ノマニマニなり(卷九一八四参照。古義に

これは實は春ふる雪を見て去年の冬ふりおきたる雪を風の吹具しもて來て此
閒にちらすらしといへるなり

といへる如し○置を從來オケルとよめり。オクとよみても可なり。梅サケル宿を梅
サク宿ともいひ雪フルル山を雪フル山(一八一八頁)ともいふと同例なればなり

君がため山田の澤にゑぐ採と雪げの水に裳のすそぬれぬ

爲君山田之澤惠具採跡雪消之水爾裳裾所沾

エグは卷十一にも

あしひきの山澤ゑぐを採にゆかむ日だにもあはむ母はせむとも

とあり。舊説には芹の事とせるを眞淵萬葉考別記は今地方によりてエグともエゴ
ともヨゴともゴワキともいふものにて葉は蘭に似根は芋を成して食用に堪ふる
ものなりといひ眞淵のいへるは莎草科の植物にてクログワキ漢名烏芋といふも
のなり雅澄は此歌の下にては芹の類なりといひ品物解にては眞淵の説に左袒せ
り。案ずるにもシクログワキならばエグホルなどこそ云はめ採とはいはじ。然るに
二處共に採といへるを見れば葉又は莖を食用とするものにてクログワキの如く

根を食ふものにあらざる事明なり。又雪ゲノ水ニ裳ノスツヌレヌといへる、芹の季
節にはかなへどおそらくはクログワキの旬には合はじ。クログワキの旬はよくは
知らねど萬葉考別記に女の田、草曳に出づとて兒に向ひて「けふはゴワキとりて來
む」といひしこと見え又品物解の頭書に秋田の稻を刈りたる跡にあるもの、由見
えて夏秋の頃のものと思はるればなり。されば今エグともエゴともヨゴともゴワ
キともグヤ(品物解頭書)ともいふものと本集の惠具とは類名異物にて本集の惠具
はなほ舊説の如く芹の事ならむ。六帖に芹とエグとを別に擧げたるは顯昭(袖中抄
卷十六)の

ふるき文はくはしく明らめずして物の異名をもたださず名のかはりたれば別
にかけることもあれば一定にあらず

といへる如く芹、惠具二物なりといふ證とするには足らず。さて芹をも烏芋をもエ
グといふは其味ゑぐければなるべし

梅が枝になきてうつろふらぐひすのはねしろたへに沫雪ぞふる

梅枝爾鳴而移徙鷺之翼白妙爾沫雪曾落

ウツロフは枝より枝に移るなり

山たかみふりくる雪を梅の花ちりかもくるとおもひつるかも

一云梅の花さきかもちると

山高三零來雪乎梅花落鴨來跡念鶴鴨

一云梅花開香裳落跡

一云の方まされり。底本の方にてはクルといふ語重なればなり。さてそのサキは例の如く軽く添へたるなり

雪をおきて梅をなこひそ(足曳の)山かたづきて家居須流君

除雪而梅莫戀足曳之山片就而家居爲流君

右二首問答

前の歌の、梅の花かと思ひしにさならぬに失望したる語調なるを不満に思ひてよめるなり。○カタヅキテははやく卷六の長歌(一一八〇夏)に

いさなとり、海かたづきて、玉ひろふ、海べをちかみ

とあり。今物を片寄することをカタヅクルといふ。カタヅクは其自動詞形なり。されば山カタヅキテは山ニ片寄リテといふことなり。ツは濁りて唱ふべし。○結句は古義の説に従ひて流を衍字としてイヘヲラス君とよむべし

詠霞

きのふこそ年ははてしか春霞かすがの山にはやたちちにけり

昨日社年者極之賀春霞春日山爾速立爾來

ふゆすぎてはるきたるらしあさひさすかすがの山に霞たなびく

寒過暖來良思朝烏指滓鹿能山爾霞輕引

うぐひすの春成良思かすが山霞たなびく夜目にみれども

鷺之春成良思春日山霞棚引夜目見侶

ウグヒスノ春は古義に

鶯ノ囀ル春といふ意なり。シラ浪ノ濱といひて白浪ノヨスル濱と云意になると同例なり

といへる如し○春成良思は一本に春來良思とありといふ○第四句にて切りて心得べし

詠柳

霜干冬の柳は見人之かづらにすべく目生にけるかも

霜十冬柳者見人之藪可爲目生來鴨

略解古義に初句をシモガレシとよめれど霜枯をはたらかしてシモガルルといふは後世の事なればなほ舊訓に従ひてシモガレノとよむべし○第三句を眞淵は良人之の誤としてヨキヒトノとよみ雅澄は見の下に八の字を補ひてミヤビトノとよめり。卷一(四七頁)にも良人ヨクミキとかける例あれば眞淵の説に従ふべし○十は干の誤なり

淺緑そめかけたりとみるまでに春のやなぎはもえにけるかも

淺緑染懸有跡見左右二春楊者目生來鴨

初句はアサミドリニとニを補ひて心得べし。ソメカクは此歌にては染めて懸くる

事なり。但後の歌にソメカク、オリカクなど云へるにはカクの意失はれてただ染め出す意、おり出す意ときこゆるもあり○以上二首又二首下なる歌の結句、目生來鴨とある目は自の誤ならむ

山のまに雪はふりつつしかすがにこの河楊はもえにけるかも

山際爾雪者零管然爲我二此河楊波毛延爾家留可聞

カハヤギといふべき事ははやく卷九(一七二三頁)にいへり

山のまの雪はけざるを水飯合川之副者もえにけるかも

山際之雪不消有乎水飯合川之副者目生來鴨

略解に第三句の飯を激の誤としてミナギラフとよみ、古義には

飯は激字の誤ならむと岡部氏が云る是はさもあるべし。但しミナギラフと訓るはわろし。霧ふ意ならば激字は遠からむ。此はタギチアフと訓べし。一卷に珠水激タキノミヤコハとある珠も隕字の誤にてオチタギツと訓べければ相例すべしといへり。案ずるにタギチアフは寒げにきこえてこゝにふさはず。水殺合の誤とし

てミナギラフとよむべし。ミナギラフは水煙の立つ事なり(卷七三頁 四六 参照)殺をキ
リに借れる例は卷四(七六七頁)に横殺雲之、卷十二に殺目山とあり○第四句を舊訓
にカハノソヘレバとよめれど副は春満のいへる如く楊の誤なるか又は柳の誤な
らむ。さればカハノヤナギハとよむべし○代匠記に「此は右の歌の作者二首にて意
をいひはたすなり」といひ略解に「右の歌の問答なるべし」といへるは第四句をカハ
ノタグヘバ、カハノソヘレバとよみて柳といふことを前の歌に譲れりと見たるよ
りの誤なり

あさなさなわがみる柳うぐひすの來居てなくべき森にはやなれ

朝且吾見柳鷺之來居而應鳴森爾早奈禮

若木の柳をよめるなり。且は且の誤なり

青柳のいと細紗、春風にみだれぬいまにみせむ子もがも

青柳之絲乃細紗春風爾不亂伊間爾令視子裳欲得

第二句を舊訓にイトノホソサヲとよめるを古義にイトノクハシサとよみ改めた

り。古義に従ふべし。クハシサはウルハシサなり○ミダレヌ伊マニの伊は例の助辭
なり卷七(一四二七頁)なる花マツ伊マニナゲキツルカモの伊におなじ○結句の意
は妹ニ見セマホシといはむに同じ(卷八一五三 参照)

(ももしきの)大宮人のかづらけるしだり柳はみれどあかぬかも

百儀城大宮人之纒有垂柳者雖見不飽鴨

カヅラケルは纒ニシタルとなり

梅の花とりもちみればわがやどの柳の眉しおもほゆるかも

梅花取持見者吾屋前之柳乃眉師所念可聞

旅にてよめるなり○ヤナギノマユは柳の芽なり。漢語にては柳眼といふ。開くるも
のなるによりて眉にたとへ眼によそふるならむ。代匠記に「柳ノマユは妻を兼て云
なるべし」といひ古義に「妻の美貌を思ひ出る意は言外にあるべし」といへるは共に
非なり。ただ旅中にて梅花を折りて故郷の柳も今かもゆらむと思遣れるのみ。卷十
九に

春の日にはれる柳をとりもちてみればみやこの大路おもほゆ

とあり。参照すべし

詠花

うぐひすのこづたふ梅のうつろへばさくらの花の時かたまけぬ
鶯之木傳梅乃移者櫻花之時片設奴

ウツロヘバはこゝにては散方ニナレバとなり。時カタマケヌは時チカヅキヌといふ意とおぼゆ

さくら花時はすぎねどみる人の戀盛コヒノサカリと今しちるらむ

櫻花時者雖不過見人之戀盛常今之將落

戀盛を舊訓にコヒノサカリとよめるを略解にコフルサカリに改めたり。コフルとよまむにミルとコフルと同格かさなりて心ゆかねばなほ舊訓に従ふべし。さてコヒノサカリとはメヅル盛なり

我刺ワガサシやなぎの絲をふきみだる風にか妹が梅のちるらむ

我刺柳絲乎吹亂風爾加妹之梅乃散覽

我刺を舊訓にワガカザスとよめるを略解古義にワガサセルに改めて略解に

集中刺柳ともよみて柳は枝を地に刺てよく生たつものなればかくいへり

と云へり。ワガサシシとよむべし。古義に

九卷に妹ガ手ヲトリテヒキヨヂウチタヲリ君刺キミガサスベキ可花サケルカモとあれば云々

といへれどこは通本に吾刺可とあるを宣長の説に従ひて吾を君の誤として引きたるにてその吾刺可は吾頭刺可の頭をおとせるにてワガカザスベキとよむべき事彼卷(一六九四頁)にいへる如し。されば今の例には引くべからず。○イモガ梅は妹

ガ宿ノ梅なり

年のはに梅はさけどもうつせみの世の人君ミコし春なかりけり

毎年梅者開友空蟬之世人君羊蹄春無有來

トシノハは毎年なり。君は吾の誤ならむ。契沖はやく「君は吾を書誤れる歟」といへり。さて世人吾とは世ノ人ナル吾となり

うつたへに鳥ははまねどしめはへてもらまくほしき梅の花かも

打細爾鳥者雖不喫繩延守卷欲寸梅花鴨

ウツタヘニはヒタストラニなり。專なり(六四六頁及八二四頁参照)。二三の間に大切ニ
オボユルママニといふことを補ひて聞くべし

馬並而高山部乎しろたへにほはしたるは梅の花かも

馬並而高山部乎白妙丹令艷色有者梅花鴨

初二を舊訓にウマナメタカキヤマベヲとよめり。さて契沖は馬ナメテをタカキ
の枕辭とせり。宣長は馬を忍の誤としてオシナベテとよめり。宣長の説に従ふべし
○第二句の舊訓は先哲皆之を是認したれど高きは山にて山邊にあらねばタカキ
マノへところいふべけれ。タカキヤマベとはいふべからず。○略解には

梅は櫻の字の誤なるべし。梅はもと吾御國の木ならねば高山におのづから生る
はなき也

といへるに従ひて古義にもサクラバナカモとよめるは第二句の誤訓と誤解とに
基づけるなれば論ずるに足らず。もとのままにてウメノハナカモとよむべし。○第
四句を略解古義にニホハセタルハとよめるは非なり。ニホハスは卷一(一一〇頁)に

キシノハニフニホハ散マシヲとありて四段活なればニホハシタルハとよむべ
し

花さきて實はならねどもながきけにおもほゆるかもやまぶきの花

花咲而實者不成登裳長氣所念鴨山振之花

ナガキケは長日月といふこと。オモホユルはシノバルルなり。○略解に

按に此歌女のうけひきていまだ逢はぬをそへたる譬喩歌なるがまぎれて入た
るなるべし

といへる如し。○さて山吹の一重なるは實を結ぶものなればこゝにいへるは八重
山吹ならむ

能登河のみな底さへにてるまでに三笠の山はさきにけるかも

能登河之水底并爾光及爾三笠之山者咲來鴨

能登川は春日山の溪間より出づる小流なり。第四句は三笠ノ山ノ花ハといふべき
を略せるなり。此格集中におほし

雪みればいまだ冬なりしかすがに春霞たち梅はちりつつ
見雪者未冬有然爲蟹春霞立梅者散乍

卷九にも

妹が門いりいづみ河のとこなめにみゆきのこれりいまだ冬かも
とあり

こそ^{ウツ}咲^シ之^シ久^コ木^キ今^{イマ}さ^サく^クいた^イづ^ヅら^ラに^ニ土^{ツチ}に^ニや^ヤ將^{マサ}墮^ツみ^ミる^ル人^{ヒト}なし^シに
去年^{クニ}咲^{サキ}之^シ久^コ木^キ今^{イマ}開^キ徒^ツ士^シ哉^ヤ將^{マサ}墮^ツ見^ミ人^{ヒト}名^ナ四^シ二^ニ

略解に

久は冬の字の誤にてフユキなるべし。、、また之久木三字左久樂の誤にてコ
ゾサケルサクライマサクか。いづれにも久木には有まじき也と翁(○眞淵いはれ
き

といひ古義には久木を足氷の誤とせり。案するに咲は殖久は若の誤にてコゾウエ
シワカキイマサクならむ。卷八に

こそこの春いこじてうゑしわがやどの若樹の梅は花さきにけり
とあり○將墮を古義にチラムとよみたれどなほオチムとよむべし

(あしひきの)山^{ヤマ}開^キて^テら^ラす^スさ^サくら^{クラ}花^{ハナ}この^{コノ}春^{ハル}雨^{アメ}に^ニ散^{チリ}去^{ユク}鴨^{カモ}

足^{タラシ}日本^{ニッポン}之^ノ山^{ヤマ}間^マ照^テ櫻^{オウゴン}花^{ハナ}是^シ春^{ハル}雨^{アメ}爾^ニ散^{チリ}去^{ユク}鴨^{カモ}

山間を舊訓にヤマノマとよめるを古義にヤマカヒに改めて

ヤマカヒと訓べし。ヤマノマとよむはひがごとなり。ヤマノマならば山際とかく
例なり。十七に夜麻可比ニサケルサクラヲとあるに同じ

といへれどヤマノマ即山の峽にあらずや。なほヤマノマとよむべし○結句は舊訓
にチリユカムカモ略解にチリヌラムカモ古義にチリニケルカモとよめり。チリユ
カムカモ又はチリイナムカモとよむべし

(うちなびく)春^{ハル}さ^サり^リく^クら^ラし^シ山^{ヤマ}の^ノま^マの^ノ最^{トホ}木^キ末^{スエ}之^ノ咲^{サキ}往^{ユク}み^ミれ^レば
打^ウ靡^ヒ春^{ハル}避^ヒ來^キ之^ノ山^{ヤマ}際^{サヘ}最^{トホ}木^キ末^{スエ}之^ノ咲^{サキ}往^{ユク}見^ミ者^{モノ}

卷八に

うちなびく春きたるらし山のまの遠木末乃開往みれば

とあり。略解に今の歌の第四句をトホキコヌレノとよめるは卷八の歌に據れるなり。之に對して訓義辨證下卷(二二頁)に

最、字に遠の意ある事なし。最の俗字叡と叢の古字叡と相似たれば漢土にてもはやくより誤りて最を叢の義に用ゐたり。されば最木末は叢木末の誤としてシゲキコヌレ又はシゲキガウレとよむべし(○採要)

といへり。最を遠の誤字としてトホキコヌレノとよむべし。○こゝの咲往をも、卷八の開往をも略解にサキヌルとよめれどサキユクとよむべき事彼卷(一四八七頁)にいへる如し

きぎしなく高圓邊にさくら花散流歴見人もがも

春鳩鳴高圓邊丹櫻花散流歴見人毛我裳

第四句は舊訓にチリナガラフルとよめるを古義にチリテナガラフに改めたり。之に従ひて第四句にて切りて心得べし。ナガラフは空より物の降るをいふ。はやく上(二九一〇頁)にいへり。○見人を略解古義にミムヒトとよめり。ミムとよまむはあし

からねどこゝをミムとよまば上(一九三二頁)なる見人名四二、次なる見人無二もミムヒトとよむべきなり。○高圓邊は高圓野の誤ならむ

阿保山の佐宿木花はけふもかもちりみだるらむみる人なしに

阿保山之佐宿木花者今日毛鴨散亂見人無二

阿保山は佐保村なる不退寺の丘陵なりといふ。○佐宿木は舊訓にサネキとよめるを略解に作樂の誤としてサクラノとよめり。げに誤字にてはあるべし

かはづなく吉野の河の瀧の上の馬酔之花曾置末勿勤

川津鳴吉野河之瀧上乃馬酔之花曾置末勿勤

馬酔を舊訓にツツジ、略解古義にアシビとよめり。宜しくアセミとよむべし(卷二二二頁参照)○略解に

結句いかにとも解がたく訓もよしなし。古今六帖にアセミノ花ゾ手ナフレソユメと有を思へば置は觸の字の誤、末は手の字の誤にして手ナフレソユメと訓んか。あしびの花を愛て手ナ觸ソとよめる也と翁いはれき。宣長云。花曾の曾のこと

ば聞えず。曾は者の誤なるべし。又勿云々曾といひてユメといへる例なし。ユメと云時は必云々勿といふ例也。六帖は改めて入れたるもの也。又或人は末は土の誤にてツチニオクナユメと訓べしといへるよし。一へり。猶考べし

といひ、古義に
大神眞潮翁の説に末は土の誤なり。ツチニオクナユメと訓べしといへり。是よろし

といひ、又

本居氏曾の詞聞えず。曾は者の誤なるべし」と云り。信にさもあるべし。アシビノハナハとよむべし

といへり。案ずるに曾を聞えずといへるは千慮の一失なり。末を土の誤としてアセミノハナヅ、ツチニオクナユメとよみて

こは吉野川の瀧の上より折來たるあせみの花ぞ、ゆめ直土ヒタツに置くな、大切にせよといふ意とすべし。卷五に

ことどはぬ木にもありともわがせこが手馴の御琴つちにおかめやも

といふ歌あり。参照すべし

春雨にあらそひかねてわがやどの櫻の花はさきそめにけり

春雨爾相争不勝而吾屋前之櫻花者開始爾家里

アラソヒカネテはスマヒカネテなり

春雨はいたくなふりそさくら花いまだみなくにちらまくをしも

春雨者甚勿零櫻花未見爾散卷惜裳

春去者ハルサちらまくをしきウツ櫻花ハナしばしはさかずふふみてもがも

春去者散卷惜櫻花片時者不咲含而毛欲得

初句を三註共にハルサレバとよみたれどチラマクと照應したるなればハルサラバとよむべし。○第三句は幽齋本に梅花とありとぞ。契沖は

腰句は第八にも梅ノ花サクフフメラズシテ、フメリトイヒシ梅ガ枝などよめるを思ふに赤人集を證として幽齋本に付べきにや。○赤人集にハルサメニチラマクヲシキウメノ花シバシサカエムヲシミテシガナとあるをいへるにや

といひ略解古義には字のまゝにサクラバナとよみて註に「櫻一本梅に作る」とのみあり。案ずるにハルサラバ散ラマクヲシキとあるを思へば冬よりさきたるなり。冬よりさきたるなれば櫻花にあらで梅花なる事明なり。○フフミテモガモはツボミテモアレカシとなり

見わたせばかすがの野べに霞たちさきにほへるは櫻花かも

見渡者春日之野邊爾霞立開艶者櫻花鴨

いつしかも此夜の明けむらぐひすのこづたひちらす梅の花みむ

何時鴨此夜之將明鷺之木傳落梅花將見

初二はハヤ此夜ノ明ケヨカシとなり

詠月

春がすみたなびくけふの暮三伏一向夜不穢照良武高松の野に

春霞田菜引今日之暮三伏一向夜不穢照良武高松之野爾

第三句の暮三伏一向夜を舊訓にユフヅクヨとよめり。されば三伏一向はツクに當

れるなり。此類と見べきは卷十三なる長歌にスガノネノ、ネモ一伏三向擬呂爾とある一伏三向なり。又卷十二に梓弓末中一伏三起とあるを舊訓にスエナカタメテとよみたれど宣長の説に従ひてスエノナカゴロとよむべし。一伏三起は一伏三向と異ならざればなり。さて三伏一向をツクとよみ一伏三向又は一伏三起をコロとよむは如何なる故か。箋註倭名抄檮蒲の註に

皇國爲ス所ノ檮蒲其詳ヲ得ル能ハズト雖然モ其采蓋四木ヲ用フルナリ。故ニ萬葉ニ折木四切木四並ニ加里ト訓メリ。又三伏一向ヲ都久ト訓ミ一伏三向ヲ古路ト訓ミ一伏三起ヲ多米ト訓ムハ當ニ是擲チテ得ル所ノ采名ナルベシ

といへり(一伏三起をタメとよむが非なる事は上にいへり。又美夫君志卷二別記附録にツクをもコロをも采の名とせずして檮蒲其物の名とせるは従はれず。畢竟カリといふ博奕に四箇の木片を擲ちて三つ伏し一つ仰ぎたるをツクといひ一つ伏し三つ仰ぎたるをコロといひしよりツクの借字に三伏一向と書きコロの借字に一伏三向又は一伏三起と書けるなり(卷六八頁○五 参照。十訓抄中卷に

御門(○嵯峨帝)一伏三仰不來待云々とか、せ給ひて是をよめとて給はせけり。

月ヨニハコヌ人マタル云々とよめりければ御氣色なほりにけりとなん、
わらはべのうつむきざいといふ物に一つ伏して三あふぬけるを月よと云也
といへるは三伏一仰を誤れるにや○高松之野は即高圓野なり之について略解
に

都と登と通へば松をマトの假字にかりたり
といひ古義に

高松はタカマトと訓べし松は言を轉して借用る例なり

といへれどマトに假るべき字なくばこそあらめ圓とも麻登ともいかやうにも書
かるべきを物遠く松をマトに借用ひむやは當時タカマトをタカマツとも(ミモロ、
マキモクをミムロ、マキムクともいひし如く)いひし故に高松と書けるにこそ○第
四句を従來キヨクテルラムとよみたれどこは卷一に

わたつみのとよはた雲にいり日さしこよひのつく夜あきらけくこそ

とある如く歌よみしは晝の程にて夜の様を豫想せしなればテラムとはいふべく
テルラムとはいふべからずされば良を奈の誤としてキヨクテリナムとよむべし

春されば^コ紀之^ホ許能^ホ暮之^ホゆ^ホづく夜おぼつかなしも山陰にして

一云はるされば木陰多ゆづくよ

春去者紀之許能暮之夕月夜鬱束無裳山陰爾指天 一云春去者木陰多
暮月夜

コノクレは樹陰なり卷八にも

ほととぎすおもはずありきこのくれのかくなるまでになどかきなかぬ

とあり木ノコノクレといふ語はあるべくもあらずされば第二句は許能暮多とあ
りしを誤れるならむ又一本の木陰多を従來コガクレオホキとよみたれどまづコ
ガクレは後世こそあれ本集の語例に據れば木ニ隠レテといふことにて樹陰とい
ふことにあらずされば木陰はキノカゲとよむべし○次にキノカゲオホキとよま
むにユフツクヨにつづきて義通せずされば木陰多はキノカゲオホミとよむべし
○オボツカナシはタドタドシなり

^{カスミタツ}朝霞春日の^{クレ}晩者このまよりうつろふ月をいつとか待たむ

朝霞春日之晚者從木間移歷月乎何時可將待

略解に

宣長云。一二の句は春日の朝に霞みてくらきを云。クレの詞はコノクレなどいふに同じ。さて其朝霞ノクラキ時分ハといふ意也。朝霞のくらき時分より夜までのまち久しきよし也といへり。此クレの詞を日の暮の事としては一首解がたし。クレハのハを濁るはわろし

といへり。案ずるに初句は霞立の誤としてハル日の枕辭とすべく晚者はクレハとよみてユフ暮ハの意とすべし。又二三の間に木ノ陰シゲケレバといふことを補ひて心得べし。○コノマヨリウツロフ月の語例は卷十一に

木間よりうつろふ月の影ををしみたちもとほるにさよふけにけり
とあり。古今集秋上なる

木間よりもりくる月の影みればこころづくしの秋は來にけり
と語勢相似たればコノマヨリウツロフはやがて木間ヨリモリクルといはむにひとしからむ。○イツトカマタムは何時ウツロハムトカ待タム。嗚呼待遠ナルカナと

なり

詠雨

春の雨にありけるものをたちかくり妹が家ぢに此日くらしつ

春之雨爾有來物乎立隱妹之家道爾此日晚都

妹ガイヘヂは妹が家ニユク道なり。村雨ナラヌ春雨ナルモノヲ雨避ストテ途中ニテ日暮ニ及ビヌとなり

詠河

今ゆきてきくものにもがあすか川はるさめふりてたぎつ湍音乎

今往而聳物爾毛我明日香川春雨零而瀧津湍音乎

結句は乎を衍字としてタギツセノオトとよむべし。何々ヲ、、モノニモガといへる例なければなり。キカム由モガとあらばこそタギツセノトヲとはいふべけれ。○聳は諸本に聞とあり

詠煙

かすが野に煙たつみゆをとめらし春野のうはぎつみてにらしも
春日野爾煙立所見臧孀等四春野之菟芽子採而煮良思文

ウハギははやく卷二(三一)九頁に野ノヘノウハギスギニケラズヤとあり。よめ菜の
事なり。ニラシモは煮ルラシモとなり。見ルベシを正しくは見ベシといふと同格な
り

野遊

かすが野の浅茅が上におもふどち遊アソビケフノ今日わすらえめやも
春日野之浅茅之上爾念共遊今日忘目八方

第四句を舊訓にアソブケフヲバ、略解にアソベルケフハ、古義にアソブゴノヒノと
よめり。ワスラエマヤモに對してヲといふべからざるは論なし。案ずるにアソビシ
ケフノとよむべし

春霞たつ春日野をゆきかへり吾はあひみむいや年のほに
春霞立春日野乎往還吾者相見彌年之黄土

ユキカヘリは往クトテ還ルトテなり。卷六に

ゆきかへり常にわが見し香椎がた明日ゆ後にはみむよしもなし

同卷過敏馬浦時作歌にもユキカヘリ見レドモアカズとあり。○吾ハアヒミムは春
日野ヲアヒ見ムといへるなり。卷五九〇五頁にも

春さらばあはむと思ひし梅の花けふのあそびにあひみつるかも

とあり。略解に「相見ンは友ニ相見ン也」といひ古義に「相見は思フ友ドチト共ニ見ム
となり」といへるは非なり。イヤ年ノハニは毎年なり

春の野にこころ將述とおもふどち來キタリ之今日者ケフくれずもあらぬか

春野爾意將述跡念共來之今日者不晚毛荒粳

述は遣の誤ならむ。舊訓にもヤラムトとよめり。ココロヤルは思ヲ慰ムルなり。第四
句は舊訓に従ひてキタリシケフハとよむべし

(ももしきの)大宮人はいとまあれや梅をかざしてここにつどへる
百穢城之大宮人者暇有也梅乎挿頭而此間集有

ココといへるは野邊なり

歎舊

ふゆすぎて暖來者年月は雖新有人はふりゆく

寒過暖來者年月者雖新有人者舊去

第二句を從來ハルシキヌレバ又ハルシキタレバとよめり。宜しくハルノキタレバとよむべし。第四句を舊訓にアラタマレドモとよめるを契沖は

本の點有の字を忘れたり。アラタナレドモと讀べし

といひ略解は契沖の説に従へるを古義は舊訓に従へり。アラタマレドモといはでアラタナレドモといへるは漢文訓讀の語法に據れるならむ

物皆は新しきよしただ人は舊之應宜

物皆者新吉唯人者舊之應宜

第二句は新シキガ佳シとなり。四五を舊訓にフリヌルノミゾヨロシカルベキとよみ略解にフリタルノミシヨロシカルベシとよめり。されどノミとよむべき字無き

が故に雅澄は之の字を耳の誤として舊訓の如くよめり。案ずるにノミといふべき處にあらず。されば舊の下に人の字を補ひてフリタルヒトシヨロシカルベシとよむべし。○年老いたる人の自慰めたるにて前の歌と一聯なり

權逢

すみのえの里得しかば(春花の)いやめづらしき君にあへるかも

住吉之里得之鹿齒春花乃益希見君相有香聞

得は略解にいへる如く行などを誤れるなり。ユキシカバは行キシニなり(卷八一五頁参照)○メヅラシキはメデタクオボユルとなり(卷八四一頁参照)

旋頭歌

春日なる三笠の山に月もいでぬかも、佐紀山にさける櫻の花の見ゆべく

春日在三笠乃山爾月母出奴可母佐紀山爾開有櫻之花乃可見

イデヌカモは出デヨカシなり。佐紀山は佐保山の西の山にていにしへの寧樂の北

に當れり。三笠山は佐紀山より東南に當れり

しら雪の常敷冬はすぎにけらしも、春霞たなびく野邊のうぐひす鳴鳥

白雪之常敷冬者過去家良霜春霞田菜引野邊之鷺鳴鳥

常敷は古義に落敷の誤としてフリシクとよめるに従ふべし。卷九(一六八九頁)なるセノ山ニ黄葉常敷の常も宣長雅澄は落の誤とせり。さてフリシクは降類なり。○鳴鳥を舊訓にナクモ、略解古義にナキヌとよめり。舊訓に従ふべし。鳥は焉の俗體なる事又モともよむべき事は卷七(一三五六頁)にいへる如し

譬喩歌

わがやどの毛桃の下に月夜さし下心吉うたてこのごろ

吾屋前之毛桃之下爾月夜指下心吉菟楯頃者

宣長の説に

心吉は誤字にて心苦なるべし。上の句は下心をいはん爲の序のみ也。さて下心苦はシタナヤマシモ又はシタニゾナゲクなども訓んか

といへり。古義は此説に従ひてシタナヤマシモとよみ略解には「シタココログシともよむべくおぼゆ」といへり。案ずるに毛桃之下は毛桃之花の誤とすべく、下心吉は下悞などの誤としてシタオホホシモとよむべし。シタは心なり。上三句は下オホホシの譬喩なり

春相聞

○

春日野、犬鷺なきわかれかへりますまもおもほせ吾を

春日野犬鷺鳴別眷益間思御吾

初二を舊訓にカスガノニイヌルウグヒスとよめり。略解には犬を去の誤として訓は通本に従ひ古義には犬を哭の誤としてナクウグヒスノとよめり。又宣長は犬を友の誤として「カスガ野ノトモウグヒスノならん」といへり。類聚古集に友鷺とあれば宣長の説に従ふべし。トモウグヒスのトモは後世友千鳥、友鶴、友船などいふトモ

なり。初二は序なり。即第二句の下に如クといふことを加へて聞くべし。三四の意はナキ別シテ歸リマス途中モとなり。○以下無題七首は人麿歌集に出でたりし歌なり

冬ごもり春さく花をたをりもち千たびのかぎりこひわたるかも

冬隠春開花手折以千遍限戀渡鴨

冬ゴモリはここなどは枕辭とせずして冬ゴモリシテの意とすべし。○略解に

花のいくたびもあかずめでらるゝ如く君を戀るといふ也

といへるはもとより採り難し。古義には

咲花を折持て或は女に見せたく思ひ或は共にかざしたく思ひなどして際しられず戀しく思ひて月日を送る哉となり

といへり。此説に従ふべし。但「月日を送る哉」といへるはこちたし。コヒワタルといひたればとてさばかり長き時を指せるにあらず

春山の霧にまだへる鶯も我にまさりて物念はめや

春山霧惑在鶯我益物念哉

代匠記及略解にこの霧を霞の事としたれど鶯のわびたる趣なれば霞にてはふさはず。霽の事なるべし

いでてみるむかひの崗に本繁さきたる花ならずばやまじ

出見向岡本繁開在花不成不止

第三句は從來モトシゲクとよみたれどモトシゲクにてはサキタルにつづきて意通せざればモトシゲミとよむべし。又花ノナルといふことなし。されば宣長は花を桃の誤字とせり。そは卷七に

はしきやしわぎへの毛桃もとしげみ花のみさきてならざらめやも

とあるに據れるなり。○上四句はナルの序にて一首の意は願フ事成ラズバ止マジといへるのみ

かすみたつ春永日こひくらし夜深去妹相鴨

霞發春永日戀暮夜深去妹相鴨

第二句を舊訓にハルノナガビヲとよめるを古義に卷一軍王の歌(一二頁)にカスミ
タツ長春日ノとあるを例として永春日ナガハルヒの誤とせり。卷十二にカスミタツ春、長日ヲ
オクカナク云々とあればもとのまゝにてあるべし。○宣長(玉勝閒卷十三)は四五を
ヨノフケユクヲイモニアハヌカモとよめり。相鴨をアハヌカモともよむべき事は
卷四(六二七頁)にいへる如くなれどヌカモにはセヨカシの意なるとセヨカシの意
なると二種ありて不の字の無きヌカモはセヨカシの方なり。さてこゝなるをセヨ
カシの意とせむにヨノフケユクヲイモニアハヌカモとは云はれねば略解古義の
如くヨノフケユキテイモニアヘルカモとよみて四五の間に始メテといふことを
補ひて心得るか又は相鴨を不相鴨の脱字としてヨノフケユクヲ妹ニアハヌカモ
とよみてアハヌカナの意とすべし

(春さればまづ)さきくさのさきくあらば後にもあはむなこひそ吾妹

春去先三枝幸命在後相莫戀吾妹

春サレバマヅの七言はサキクサにかゝれる枕辭にて春サレバマヅサクサキ草ノ
といふべきをつづめたるなり。而して花といはざるを見ればそのサクは生ふる事、

萌ゆる事と認むべきなり。本集には生をサキとよめる例少からざる事古義卷七六
十九丁にいへるが如し(本書一四一六頁に引けり)。さてサキクサは如何なるものと
も未定まらず。三枝とかけると、サキ草といふと、今の歌に春サレバマヅサクサノ
とあるとによりて三叉を成せる草にて春初に萌ゆるものと知らるるのみ。古來檜
又山百合又蒼朮又三楹又靈芝又沈丁花又福壽草なりなどいへれどいづれもうべ
なひがたし。案ずるにサキクサは今のミツバ即三葉芹ならむ。而して催馬樂の歌に
この殿はうべもとみけりさきくさのみつばよつばのなかに殿づくりせり
とあるサキクサノはただ三ツにかゝれるにはあらでミツバまでかゝれる枕辭な
らむ

春されば爲垂柳シダのとををにも妹が心にのりにけるかも

春去爲垂柳十緒妹心乘在鴨

右柿本朝臣人麿歌集出

第二句を舊訓にシダリヤナギノとよめるを古義にシダルヤナギノに改めたり。之
に従ふべし。初二はトヲヲにかゝれる序にてトヲヲニは撓ムバカリといふ意にて

こゝにては乗の形容辭なり。妹ガ心ニノルとは妹ガ此方ノ心ニ乗ルとなり。當時いひなれし一種の辭づかひなり。はやく卷二にも

あづま人ののぎきのはこの荷の緒にも妹がこころにのりにけるかもとあり。下にも多し

寄鳥

春さればもずの草ぐき見えずとも吾は見やらむ君があたりは

春之在者伯勞鳥之草具吉雖不見吾者見將遣君之當婆

モズノ草グキは百舌鳥ノ草クグリなり。初二はミエズにかゝれる序なり。上三句の意は春ニナレバ草ガ萌エテモズノ草グキガ見エザル如ク見エズトモとなり。○第三句以下は君ガアタリハココヨリ見エズトモ我ハ心アテニソノアタリヲ見ヤラムといへるなり

かほ鳥のまなくしばなく春の野の草根のしげき戀もするかも

容鳥之間無數鳴春野之草根之繁戀毛爲鳴

草根ノまでは序なり

寄花

春されば宇△乃花具多思わがこえし妹が垣間はあれにけるかも

春去者宇乃花具多思吾越之妹我垣間者荒來鴨

第二句を従來字のまゝにウノハナグタシとよみ其語例として卷十九なるウノ花ヲ令腐ナガメノといふ歌を引けり。さて略解には此歌を釋して

卯花垣を忍越ゆとて其花を散しなどせしが久しく通はずして其所の荒たるさまを見てよめる也

といへり。卯花は夏の物にて春の物にあらねば春サレバ卯ノ花グタシとはいふべからず。まして其卯花をとかくせしことを久しき後に思出でてよめる歌を春相聞には入るべからず。又卯花を散らしなどする事をクタスとはいふべからず。次に古義には

わがこえし妹が垣間は春されば宇乃花具多思あれにけるかもと句の次第を更へてきくべしといひて

わが親しく通ひなれて常に越て來し妹が家の垣間は此ごろわが遠ざかりて來ざりしかばたださへあるに卯花を雨に腐らしなどいやましにあれまされるかなと云か

といへり。即歌よみし時を卯花の朽つる時とせるなり。前にもいへる如く春サレバ卯ノ花クタシといふべからぬ上に卯花ヲ雨ニ腐ラシといふことをただウノ花クタシといふべきにあらず。案ずるに宇乃花は略解に引きて斥けたる或説の如く宇米乃花の米をおとしたるにて具多思は有都里などありしを誤れるならむ。即原作は

春されば梅の花うつりわがこえし妹が垣間はあれにけるかも

とありしならむ。ウツリはウツロヒなり。たとへば卷八に秋山ニモミヅコノ葉ノウツリナバ、古今集春下にハナノ色ハウツリニケリナとあり。○この垣間は築地のくづれをいへるならむ。アレニケルカモは殺風景ニナツタデアラウナとなり

梅の花さきちる苑にわれゆかむ君が使をかたまちがてり

梅花咲散苑爾吾將去君之使乎片待香花光

卷十八に重出せるにはカタマチ我底良とあり。ガテリはガテラにおなじ。サキチルのサキはただ軽く添へたるなり。○苑は苑とあるべし。結句の花は衍字か

藤なみのさける春野に蔓葛下夜之戀者久雲在

藤浪咲春野爾蔓葛下夜之戀者久雲在

第三句を従來ハフクズノとよみさて略解に「初句は春野をいはん爲のみ」といへれど春野の葛をいはむとて添物に藤浪を繰出さむだにあるに其添物によりて寄花の題に収めむこと穩ならず。案ずるに第三句はハフカツラとよむべし。そのカツラはやがて藤ノカツラなり。○次に第四句を略解古義にシタヨシコヒバとよみ、さて略解に

シタヨは下従の意なり。シは助辭なり。葛の下はふを以て下ヨリといはん序とせり

といひ古義にも

本の句はシタを云む料の序なり

といへれどクズにまれカツラにまれ下ハフなどの序とこそすべけれ、單に下又は

下ヨリの序とはすべからず。よりて案ずるに下ヨシ戀バは下ヨシ延バの誤ならむ。古事記仁徳天皇の段に

やまとへにゆくはたがつまこもりづの志多用波閉都都ゆくはたがつま
とありてシタヨハフは竊に心を通はすをいふ二八二九頁及一八七一頁シタバフ
参照。されば上三句は下ヨハフにかゝれる序なり。○結句の久雲在を略解古義共に
ヒサシクモアラムとよみたるはわろし。宣長の
久は乏の誤にてトモシクモアラムなるべし

といへるに従ひてシノビシノビニ心ヲ通ハサバ飽足ラザラムの意とすべし

春の野に霞たなびきさく花のかくなるまでにあはぬ君かも

春野爾霞棚引咲花之如是成二手爾不逢君可母

略解に「ナルは實になるをいふ」といひ古義も之に同じたれどもし此説の如くなら
ばサクをサキシの意とし又夏相聞に入るべき歌を誤りて春相聞に入れたりとせ
ざるべからず。卷八に

ほととぎすおもはずありきこのくれの如此成左右爾などか來なかぬ

とあると合せて思ふにこゝのカクナルマデニはカク盛ニナルマデといふ意なり

わがせここにわがこふらくは奥山の馬酔の花の今盛なり

吾瀬子爾吾戀良久者奥山之馬酔花之今盛有

コフラクハは戀フル事ハとなり。三四は序なり。アセミノ花ノ如クといふ意なり。卷
三に

あをによしならのみやこはさく花のにはふがごとく今さかりなり

卷八にも

つばなぬく淺茅が原のつばすみれ今さかりなりわがこふらくは

とあり

梅の花しだり柳にをりまじへ花爾たむけば君にあはむかも

梅花四垂柳爾折雜花爾供養者君爾相可毛

第四句の花爾は花トシテの意ときかれざるにもあらねど初句のウメノ花とかさ
なればなほ誤字とすべし。さて略解には

或人花は神の誤也といへり。さも有べし

といへれど仏の誤として音にてブツとよむべし。タムケバを供養者とかけるも佛なればこそなれ

(をみなべし)さき野におふるしらつづし知らぬ事もちいはれし吾背^{ウガハ}

姫部思咲野爾生白管自不知事以所言之吾背

ヲミナベシはサキ野の枕辭、サキ野は佐紀野にていにしへの寧樂の北にあり。卷四にも

をみなべしさき澤におふる花がつみかつてもしらぬ戀もするかも

とあり。○上三句は序なり。シラヌ事はオボエナキ事なり。略解古義にイハレシヨといひて男に訴ふる意としたれどイハレシ吾背とつづきて聞え、イハレシにて切れては聞えず。おそらくは吾身とありしを吾背に誤れるならむ。卷十三に

ひこづらひありなみすれど、いひづらひありなみすれど、ありなみえずぞ、いはれにし我身

とあり。イハレシはイヒ騒ガレシなり

梅の花吾はちらさじ(あをによし)平城^{ナガノ}之人^{ヒラノ}來つづ見るがね

梅花吾者不令落青丹吉平城之人來管見之根

チラサジはこゝにては大切ニ保護セムとなり。○第四句を舊訓にナラナル人ノとよみたれど之の字にてはナルとよみがたきによりて略解に

人の上在の字を脱せしか又は之は在の誤かなるべし

といへり。ミルガネは見ル爲ニなり。○略解に又

按にただ梅花を奈良人に見せんとのみいふ様に聞ゆれどこゝのついで皆相聞なればさにはあらじ。奈良人の我娘にすむべきよし有て娘を梅にたとへて其人の來りすむまでは他し人に逢はせじといふ意なるべし

といへり。此説の如し。譬喩歌なればこそウメノ花ワレハチラサジといへるなれ。まことの梅花は開落を心に任すべきにあらず

如是有者何^カ如^ナら^ルゑ^ケむ^カ山^ナぶ^キの^カや^ム時^モなく^カこ^ノふ^ラく^カおも^ヘば

如是有者何如殖兼山振乃止時喪哭戀良苦念者

初句を舊訓にカクシアラバとよみ、略解にカクシアレバとよみ、古義にコトナラバとよめり。アラバ、ナラバと未來にいひてウエケムと過去にはいふべからず。カクシアレバとよめるはた何如ウエケムと打合はず。又何如は略解古義にイカデとよめれど當時いまだイカデといふ語は無ければナニカとよむべし(一七七二頁参照)。さてナニカウエケムと相副はしむるにはコトナルヲ、コトナルニ、カクナルヲ、カクナルニなどいはざるべからず。しばらく者を煮の誤としてカクナルニとよむべし。カクナルニの語例は卷一(二六頁)に神代ヨリカクナルラシ、イニシヘモ、シカナレコソとあり。○ヤマブキはヤム時モナクにかゝれる枕辭にて又一首の對象物なり。一首の意は

山吹ノ花ヲ見レバ止ム時モナク妹の戀ヒラルル事ヨ、カカルヲイカデ此花ハ植エケム

といへるなり。山吹は卷十九に

妹に似る草とみしよりわがしめし野邊の山吹たれかたをりし
とさへよめり

寄霜

春されば水草の上におく霜のけつつも我はこひわたるかも

春去者水草之上爾置霜之消乍毛我者戀度鴨

上三句は序なり。水草について契沖は

水は只借てかける歟。春になりてもまだ霜のふる比は水草はなき物なり

といひ略解には『ミクサは眞草也』といひ古義には『水草は字の如く水に生たる草なり』といへり。卷八に

秋づけば尾花が上におく露のけぬべくも吾はおもほゆるかも

又下に

秋づけば水草の花のあえぬがにおもへど知らじただにあはざれば

とあるを思へば水と書けるを借字として卷一なるアキノ野ノ美草カリフキのミクサとおなじく薄の事とすべし。○ケツツは心消エツツなり

寄霞

春霞山棚引おほほしく妹をあひみて後こひむかも
春霞山棚引鬱妹乎相見後戀毳

初二を契沖がハルガスミヤマニタナビキとよめるを古義には春山霞棚引の誤としてハルヤマニカスミタナビキとよめり。卷十一にカグ山ニ雲キタナビキオホホシクとあれば古義の説に従ふべし。○オホホシクは漠然トなり。アヒ見テはただ見テといはむにひとし。相寝る意にはあらず

春霞たちにし日よりけふまでにわがこひやまず本之繁家波
一云かたもひにして

春霞立爾之日從至今日吾戀不止本之繁家波 一云片念爾指天

結句は戀之繁家波などの誤ならむ。もし然らばコヒノシゲケクとよみて戀ノ繁カルニといふ意とすべし(一六六五頁参照)

(さにづらふ)妹をおもふと霞たつ春日毛晚爾こひわたるかも
佐丹頰經妹乎念登霞立春日毛晚爾戀度可母

サニヅラフは准枕辭なり。○第四句を從來ハルビモクレニとよめり。さてクレニは宣長の説に

齊明紀の歌にウシロモ俱例ニオキテカユカムとあるクレニに同じく心のはれぬ事也

といへり。案ずるに齊明天皇の御製歌なるウシロモクレニは熟語にてウシロメタクといふことなれば今の例には引くべからず。今は春日能晚爾などありし能を毛に誤れるならむ。上一九四一頁にも朝霞春日之晚者とあり

(靈寸春)吾山之於爾たつ霞雖立雖座君がまにまに
靈寸春吾山之於爾立霞雖立雖座君之隨意

初二もとのまゝならばタマキハルワガヤマノウヘニとよみてタマキハルを枕辭とすべし。宣長記傳二二一二頁は吾山を春山の誤としたれどタマキハルより吾にも春にもかゝれる例なし。案ずるに吾山は吾家の誤ならむ。袖中抄に此歌を引けるにワガヤとあり又卷九に

ぬばたまの夜霧ぞたてるころも手をたか屋の於にたなびくまでに

とあり。次に靈寸春は愛寸吉ハシキの誤ならむ。卷七一四二六頁に波之吉也思吾家乃毛桃ハシキまた景行天皇紀に波辭ハシ積豫辭ヨシ和藝幣能伽多由カタクとあり。されば初二はハシキヨシワギヘノウヘニとよむべし。○第四句は略解に従ひてタツトモウトモとよむべし。キルをいにしヘウといひしなり。さて四五の意を古義に立居起臥をいはずともかくにも君が心まかせにせむとなり」と釋したれどもしる意ならばタツモキルモとこそいふべけれ。おそらくは去ラムト思ハバ去ルベク留ラムト思ハバ留ルベクスベテ君ガ心ニ任セタマフベシといふ意ならむ。○上三句は序なり

見わたせばかすがの野邊に立霞カスミみまくのほしき君がすがたか
見渡者春日之野邊爾立霞見卷之欲君之容儀香

略解には

野邊の霞の見あかぬ如く常に見まほしむ也

といひ古義には

本句は霞の立るけしきの見まほしきとつづきたる序にてかくれたるところなし

といへり。案ずるに第三句を霞立の顛倒としてカスミタチとよみてカスガノ野邊ニ霞タチテ見マホシキガ如ク見マホシキ君ガ姿カといふ意とすべし。上なるわがやどの毛桃の花に月夜さし下おほほしもうたてこのころなどと同格なり

こひつつも今日はくらしつ霞たつ明日の春日を如何くらすむ

戀乍毛今日者暮都霞立明日之春日乎如何將晚

カスミタツは明日ノを隔ててハル日にかかれる枕辭なり。如何を古義にイカデとよめるはわろし。イカニとよむべし

寄雨

吾背子ワセコにこひてすべなみ春雨のふる別ワキしらにいでてこしかも

吾背子爾戀而爲便莫春雨之零別不知出而來可聞

略解に「背は妹の字を誤れるならん」といへり。之に従ふべし。○ハルサメノフル別シラニとは春雨ノ降ルヲモ辨ヘズといふ意なり

今更に君はいゆかじ春雨のころを人の知らざらなくに
今更君者伊不往春雨之情乎人之不知有名國

略解に

此歌女の歌としては一首穩ならず。宣長云。君は吾の誤也。さて是も右なると同人の歌にてこれは道中にて思ひ返してよめるなるべし。春雨ノ降ワキヲモシラズ出テハ來ツレドモ今ヨリ又イカニ甚クフルベキモシラレネバコレヨリ歸ルベシ。今更ユカジと也。人ノといへるは雨ノ事ハ人間ノハカリ知ベキナラネバの意也。シラザラナクニはシラザルニ也といへり

といへり。げに君は吾の誤ならむ。但前のと別なる歌なるべし。人ノは妹ノなり。シラザラナクニはシラザルニにあらず。知ラザルニアラヌニにてやがて知レルニなり。春雨ノココロとは春雨の様子にてふりそむれば速には晴れぬ事なり。古義に宣長の『右なると同人の歌』といふ説に従ひて

春雨のふるのふらぬのと云差別をもしらす思に堪かねて出で來し情の深さを妹は知らねば來しかひもなし。今更に來ることを吾はせじと恨みたるなるべし

といへるは宣長と同じくイマサラニとあるを聞誤れるなり。今サラニは今ニナツテといふばかりの意なり。されば雨ノフリソメシ頃ニコソユカバ行カメ今ニナツテハ我ハ行カジといへるなり。古義に又

シラザラナクニはシラザルコトナルヲの意なり。コヒシキコトナルヲと云意なるをコヒシケナクニといふと同例にて古風の一の格なり

といへるはいみじき誤なり。コヒシケナクニといふ辭は無し

春雨に衣はいたくとほらめや七日しふらば七夜こじとや

春雨爾衣甚將通哉七日四零者七夜不來哉

こは前の歌に對する答なり。されば本來下なる問答の中に収むべきなり。略解に『右とはこと時の歌ながら云々』といへるはくちをし。三四の間にイタクトホリモセネバ來ムト思ハバ來ラルベキニなどいふ意を含めるなり。四五めでたし

梅の花ちらすはるさめ多零△たびにや君がいほりせるらむ

梅花令散春雨多零客爾也君之廬入西留良武

第三句を舊訓にサハニフルとよみ略解に『多は痛の草書より誤りてイタクフル歟』といひ古義に『重字の誤なるべし』といひてシキテフルとよめり。字のまゝにサハニフルとよみてもあるべけれど、フルヲとあらではタビニヤにつづきてと、のはずされば零の下に乎をおとせりと認むべし

寄草

國栖等之春菜將採司馬の野の數君をおもふこのごろ
國栖等之春菜將採司馬乃野之數君麻思比日

初句を舊訓にクニスラガとよめるを略解にクズラガ或はクズドモガとよめり。案ずるにクニスと假字書にせる例こそみえね國栖國巢國主國樺などかけるを見れば、もとはクニスとぞいひけむ。はやく記傳卷十八(一一一七頁)に

昔より久受と呼來れ、ども此記の例、もし久受ならむには國字は書くまじきをこゝにも輕島宮段にも又他の古書にも皆國字をかけるを思ふに上代にはクニスといひけむをや、後に音便にて久受とはなれるなるべし

といへり○春菜を舊訓及略解にワカナとよめれど字のまゝにハルナとよむべし

(卷八七頁 參照)○司馬乃野を舊訓にシバノ野略解にシメノ野とよみたれどシマシマの序としたるを思へば古義に従ひてシマノ野とよむべし。さて略解に將採をツマムトとよめるはツマムトシメといひかけたるものとせるなれど司馬をシメとよむが非なる事今いひし如くなれば將採は舊訓の如くツムラムとよむべし。シマノ野は吉野山中にあり。古義には島之野の意なるべしといへり。此説よろし。川のゆきめぐれる處を島といひし事は卷九(一七六四頁)にいへる如し。數はシマシマとよむべし(從來シバシバとよめり)。上三句はシマシマにかゝれる序なり

(春草の)しげき吾戀、大海の方往浪の千重につもりぬ

春草之繁吾戀大海方往浪之千重積

略解に『往は依の字の誤也』といへるに従ふべし。へを方とかけるは無論借字にてへは岸なり。三四は序なり

おほほしくきみをあひみて(すがの根の)長き春日をこひわたるかも
不明公乎相見而菅根乃長春日乎孤戀渡鴨

上(一九六四頁)にもオホホシク妹ヲアヒミテ後コヒムカモとあり。戀は悲の誤か

寄松

梅の花さきてちりなばわぎもこを來むか來じかとわがまつの木ぞ
梅花咲而落去者吾妹乎將來香不來香跡吾待乃木曾

こは句をも辭をもおきかへて

梅の花さきてちりなば來じか來むかと我妹子をわがまつの木ぞ

として心得べし。サキテは例の如く軽く添へたるなり。さて此歌は松の一枝に附けて贈れるなり。さらずばワガマツノ木ゾとはいふべからず。古義に之を釋して『其梅花の散失たらば其跡は松木のみにて見に來べき物もなければ云々』といへるはいみじき誤なり

寄雲

(しらまゆみ今)春山にゆく雲のゆきやわかれむこひしきものを
白檀弓今春山爾去雲之逝哉將別戀敷物乎

契沖の説に

シラマユミはイマを隔て、ハルにかゝれるなり。シラマ弓射とつづけるにあらず

といへる如し。雅澄が

春山ニ今ユク雲ノと云意なるべし。今の言は下に移して心得る例なり
といへるは非なり。もしさる意ならばハル山ニ今とあるべければなり。今までを枕辭とすべし。今の字は押などの誤にてもあるべし。○ハル山ニのニはユ又はヲにかよふニなり。ハル山への意ならばへとあるべければなり。○上三句は序なり。別に臨みてよめる歌なり

贈纒

ますらを之ふしるなげきて造りたるしだり柳之纒爲吾妹
大夫之伏居嘆而造有四垂柳之纒爲吾妹

マストラヲは作者自言へるなり。○フシキナゲキテを略解に

柳のかづら造りたるいたづきを強くいふか。又は伏を夜とし居るを晝として夜

晝妹を思ひなげくといふ歎
と釋し古義に

伏しては嘆き居ては嘆き色々心をつくしてつくりたるしだり柳のかづらぞよ
と釋せり。古義の釋に従ふべし。ナゲクはため息する事にてフシキナゲキテは所詮
根氣ヲ盡シテと云ことなり。○結句を舊訓にカヅラセヨワギモ、略解にカヅラセワ
ギモとよみ古義には柳の下の之を曾の誤としてシダリヤナギノカヅラヅワギモとよめり。案ずるに爲を焉の誤としてシダリヤナギノカヅラヅワギモとよむべし

悲別

朝戸出の君がすがたをよく見ずて長き春日をこひやくらさむ
朝戸出之君之儀乎曲不見而長春日乎戀八九良三

契沖いはく

朝戸出ノ云々は明ぬとて戸を押明て別て出るさまなり。夜戸出ノスガタ(○)卷十
二ともよめり
といへり

問答

春山の馬酔の花の不悪きみにはしゑやよせぬともよし
春山之馬酔花之不悪公爾波思惠也所因友好

初二は序なり。不悪は舊訓の如くニクカラヌとよむべし。古義にアシカラヌとよめ
るがわろき事は卷八(一四九一頁なるサケルアセミノ、ニクカラヌ、君ヲイツシカ、ユ
キテハヤミムの處にいへる如し。○シエヤは間投詞なり。ヨセヌトモは我ヲタグヘ
イフトモとなり。略解に

たとひ人の言依せいひさわぐともよしと也。女の歌也
といへる如し

いそのかみふるの神杉かむさびて吾や更更戀にあひにける
石上振乃神杉神備而吾八更更戀爾相爾家留

右一首不有春歌而猶以和故載於茲次

初二は序、カムサビテは年老イテといふ事なり。○第四句を従来ワレヤサラサラと

よめり。卷十二に

我背子が來むとかたりし夜はすぎぬ思^シ咲^キ八更更しこりこめやも

といへる例あれどなほ穩ならず。今更の誤か○卷十一にも

いそのかみふるの神杉かむさびて戀をも我は更にするかも

といふ歌あり○此歌は前の歌の答とはおぼえず。おそらくは前の歌との間に二首落ちたるならむ○左註の不有は非とあるべきなり

狹野方は實にならずとも花^{ハナ}耳^{ミミ}△さきて見えこそ戀のなぐさに

狹野方波實爾雖不成花耳開而所見社戀之名草爾

略解に

此下に沙額田乃野邊ノアキハギともよめればこゝも野の名也其所の梅桃などもていふ也

といひ古義にも『此下に沙額田乃野邊とあると同所なるべし』といへれどこの狹野方は地名とはおぼえず。もと狹野榛とありて榛の字のよみがたくなれりしを傳寫の際に下に沙額田乃云々とあるよりサヌカタと推定めて方の字を填めたるに

はあらざるか。狹野榛は卷一(三六頁)に見えたり○第三句の花耳を契沖以下ハナノミモとよめり訓はげに然るべし。但そのモは緊要なるテニヲハなれば母の字をおとせるなりと認めざるべからず○逢フ迄ハナクトモ戀ノ慰ニ辭ダニ通ハセヨといへるなり○此歌は答歌に春雨フリテとあるによりて春相聞に入れたるなり。誤りて所謂狹野方を春花さくものと思ふべからず

狹野方は實になりにしを今更に春雨ふりて花さかめやも

狹野方波實爾成西乎今更春雨零而花將咲八方

答歌の方は譬喩ならで狹野方其物につきていへるなり。略解古義共に譬喩と見たれば其釋は當らず○一首の意はノタマヘル狹野方ハ夙ク實ニナリニシヲ今更春雨フリテ花サカムヤハといへるなり

(梓弓)引津の邊なるなのりそ之花さくまでにあはぬ君かも

梓弓引津邊有莫告藻之花咲及二不會君毳

略解には誤りて引津邊有の津の下に野の字を加へたり。卷七(一三六五頁)に

梓弓引津の邊なるなのりその花、及採あはざらめやもなのりその花とありて及採を從來ツムマデニとよめるを採を咲の誤としてサクマデニとよむべき由其歌の處にていひつ。略解に卷七なるといづれかもとならむといへれど旋頭歌の第六句に意義あるを思へば旋頭歌の方もとなる事明なり○第三句の之は略解の如くノとよむべし(舊訓と古義とはガとよめり)

川上のいつもの花のいつもいつも來ませ吾背子、時じけめやも

川上之伊都藻之花之何時何時來座吾背子時自異目八方

此歌はやく卷四(六二一頁)に出でたり。イツモは群レル藻、イツモイツモはイツニテモ、時ジケメヤモは時ジカラムヤモにて畢竟時ナラザラムヤハなり○右の二首果して問答ならば前の歌は古歌を作更へ後の歌は古歌を借りたるならむ

春雨のやまず零零わがこふる人の目すらを不令相見

春雨之不止零零吾戀人之目尙矣不令相見

零零を舊訓にフルフルとよめるを宣長は零乍の誤としてフリツツとよみ古義は

舊訓に従へり。今いふフリフリを古くはフルフルといへどそはフリナガラといふ義にてこゝにかなはざる上に答歌にも不止零乍とあれば宣長の誤字説に従ふべし○スラは主語を強むる辭なり(卷九一七頁○参照)○結句を舊訓にアヒミセザラムとよめるを雅澄はアヒミセナクニ改めたり。宜しくアヒミシメナクとよむべし。アヒミシメナクは相見セヌコトカナと云はむに似たり

吾妹子にこひつつをれば春雨の彼もしるごとやまずふりつつ

吾妹子爾戀乍居者春雨之彼毛知如不止零乍

彼毛を從來カレモとよめれどソレモとよむべし。さて三四は春雨モ知ルゴトといふべきを言足らぬが故にソレを挿めるなり。ソレ、ソノを加へて言數を滿せる例は集中に多し(卷八一頁、四、卷九一八頁)などを見べし。又彼の字をソノ、ソなどよめる例はた集中に見えたり。地名にも彼杵と書いてソノキとよむ例あり

相念はぬ妹をやもとな(すがのね)ながき春日をおもひくらさむ

相不念妹哉本名菅根之長春日乎念晩牟

妹ヲヤのヤはオモヒクラサムと照應せり。さればクラサムの下に引下げてクラサムカと直して心得べし。妹ヲヤのヲはナルニのヲなり。一本にアヒオモハズアルラム兒ユエとあると卷四に

相おもはぬ人をやもとなしろたへの袖ひづまでにねのみしなかも

とあるとを合せ見て心得べし。○ハルビヲはクラサムにかゝれり。されば一首の意は

相念ハヌ妹ナルニ心ノ外ニ其ヲ思ヒテ長キ春日ヲ暮サムカ
となり

春さればまづなく鳥のうぐひすの事^{コトサキダテ}先立^{ダテ}之^ヲ君をし待たむ

春去者先鳴鳥乃鷺之事先立之君乎之將待

略解に第四句をコトサキダテシとよみて

春鳥の中に鶯はことにとく來鳴けばコトサキ立といはん序とせり。心は言出初シ君ヲ待ミンといふ也。卷四、言出シハタガコトナルカ小山田ノナハシロ水ノ中ヨドニシテ、神代紀如何婦人反先^{コトサキダテ}言乎

といひ古義には舊訓に従ひてコトサキダテシとよめり。案ずるに事は如の借字にて卷八(一六二一頁)なる

あしひきの山下とよみなく鹿の事^{コト}もしかもわがこころづま

の事にひとし。次に先立之の之は互の誤としてサキダテとよむべし。即アヒオモハヌ妹ヲヤ云々といへるに對して我ヨリ先ンジテ君ヲ待タムといへるなり。第二句のトリノは鳥ナルといふ意なり

あひおもはずあるらむ兒ゆゑ(玉の緒の)長き春日をおもひくらさく

相不念將有兒故玉緒長春日乎念晚久

略解古義にいへる如く上なるアヒオモハヌといふ歌の傳のかはれるなり。別の歌にあらず。されば上なる歌の次に或本歌曰または一云として掲ぐべきなり
兒ユエは子ナルニなり。クラサクはクラス事ヨとなり

夏雑歌

詠鳥

大夫^{マスラヲ}丹^ニ 出^イたちむかふ 故郷の 神名備山に あけくれば 柘^ツのさ
えだに ゆふされば 小松がうれに 里人の ききこふるまで 山
彦の 答響^{コトコム}まで ほととぎす △ つま戀すらし さ夜中になく

大夫丹出立向故郷之神名備山爾明來者柘之左枝爾暮去者小松之若末
爾里人之聞戀麻田山彦乃答響萬田霍公鳥都麻戀爲良思左夜中爾鳴

一二句を舊訓にマ斯拉ヲニイデタチムカフとよみたれどさては意通せざれば或
人は大夫丹を走出^{ハシライデニ}丹の誤とし(略解に據る)雅澄は丹を乃の誤としてマ斯拉ヲと
よめり。ハシリイデニイデタツとはいふべきならねば雅澄の説の方まされり。さる
にてもイデタチムカフといふこと穩ならず。イデタツは門より出づる事なればな
り。雅澄も自安んせざる所ありきと見えて

さてイデタツは男女にかぎるべからぬが如くなれども男は日々^{ヒトヒト}に外に出、女は
内にのみこもり居て常に出る事なき故に取分てマ斯拉ヲノイデタチムカフと

いへるにやあらむ

といへり。案ずるに出は來の誤字にてマ斯拉ヲノキタチムカフならむ。マ斯拉ヲは
作者自云へるなり。さて來タチムカフとすれば作者は他郷に住める人、もとの如く
出タチムカフとすれば作者は此里に住める人なり。其いづれとするが穩なるべき
かは反歌と對照して思定むべし。○フルサトは飛鳥にて神名備山は雷岳なり。ツミ
は野桑なり(四七八頁參照)答響は契沖に従ひてアヒトヨムとよむべし(略解にはコ
タヘスルとよめり)。さてアケクレバ、ユフサレバといひてサヨナカニナクとは収む
べからず。又ツミノサエダニ、小松ガウレニを受くる辭なかるべからず。さればおそ
らくはホトトギスの次に來ナキトヨモシ、旅ナガラなどの二句おちたるならむ

反歌

たびにして妻ごひすらしほととぎす神なび山にさよふけてなく
客爾爲而妻戀爲良思霍公鳥神名備山爾左夜深而鳴

右古歌集中出

作者を他郷の人として子規モ我如ク旅ニシテ妻戀スラシといふ意とせむ方哀深からずや

ほととぎすながはつこゑは於^ウ欲^モ得^ガ五月の玉にまじへてぬかむ

霍公鳥汝始音者於吾欲得五月之珠爾交而將貫

古義に

於吾欲得は吾はもし花などの誤にはあらざるべきか。さらばハナニモガと訓べし。もとのまゝにては心ゆかず

といへり。此説に従ふべし。サツキノ玉は藥玉なり。卷八にも

ほととぎすいたくななきそながこゑを五月の玉にあへぬくまでに

とあり

朝霞たなびく野邊に(あしひきの)山ほととぎすいつか來なかむ

朝霞棚引野邊足檜木乃山霍公鳥何時來將鳴

春に限りてカスミといふは後の事なり。いにしへは時に拘はらずいひき。卷八にも

霞たつあまの河原に君まつといかよふ程に裳のすそぬれぬ

とあり。古義に

此歌は春よみし歌ときこえたれば春部に入べきなれど霍公鳥を主としてよめる歌なるゆゑにこゝに載たるなるべし

といへるは従はれず。さていにしへカスミといひしは薄霧にこそ

(あさ霞)八重山こえて喚^ウ孤^コ鳥^{トリ}吟^{ナキ}八^ヤ汝^{ナガ}來^{コシ}やどもあらなくに

旦霞八重山越而喚孤鳥吟八汝來屋戸母不有九二

アサガスミは八重にかゝれる枕辭なり。○略解に

孤はもと子と有しが誤れるか。此歌は春の部に入べきを誤てこゝ入たり

といへり。げに孤は子の誤と認むべし。○第四句を舊訓にナキヤナガクルとよめるを古義には吟を喚呼などの誤としてヨビとよめり。舊訓の如くもとのまゝにてナ

キヤとよむべし。但汝來はナガコシとよみ改むべし。○ヤドモアラナクニといへるを思へば山中にて此鳥の聲をきゝてよみしなり。さて此歌は略解古義の如く移して春雑歌に入るべきなり

ほととぎすなくこゑきくやうの花のさきちるをかにくずひくをとめ

霍公鳥鳴音聞哉宇能花乃開落岳爾田草引臈媯

月夜よみなくほととぎす欲見^{ホリワレクサ}吾草取有^{トレリ}見人^{ミム}もがも

月夜吉鳴霍公鳥欲見吾草取有見人毛欲得

三四を略解にミマクホリワガクサトレルとよみ、さて宣長の説を擧げて

吾は今の誤にてイマクサトレリなり。草トルは凡て鳥の木の枝にとまり居る事

也。ミマクホリはほととぎすが月を見まくほりて今木の枝にゐるを來て見ん人

もがな也。卷十九ホトトギスキナキトヨマバ草トラン花橋ヲヤドニハウエズテ

とよめるもほととぎすの來てとまるべき橋をうゑんといふ也といへり

といへり。古義には三四をミガホレバイマクサトレリとよみ、さて

中山嚴水云。此歌大方は本居翁の説の如し。但し霍公鳥が月を見まくほりする意

に説れたるはいかがなり。欲見はミマホレバとよむべし。見マクホリスレバなり。

なくほととぎすを見まほしと思ひて見やりたれば草取て鳴居たるを見出した

るなりと云り。その意ならばミガホレバとよむべし。さてこゝは欲見者とありし

を、もしは者、字の脱たるにもあらむか

といへり。案ずるに欲見は舊訓の如くミマクホリとよみ第四句は契沖に従ひてワ

レクサトレリとよみ、結句は人を由の誤としてミムヨシモガモとよむべし。

月夜ニナク子規ノ影ノ地上ニウツルヲ見ムト欲シテ庭前ノ草ヲ取除キタリ。イ

カデ見ム由モガナ

といへるなり。卷十九なる

ほととぎす來なきとよまば草とらむ花たちばなを屋戸爾波不殖而[△]

は此歌に據れるにて結句は不を省きてヤドニハウエテとよむべし

藤浪のちらまくをしみほととぎす今城のをかをなきてこゆなり

藤浪之散卷惜霍公鳥今城岳剛鳴而越奈利

今城は大和の地名なり。略解に「ホトトギス今來といふ心につづけたり」といひ、古義

にも今城ノ岳ヲ今鳴テ云々と釋けるは非なり。いひかけにあらず。もし今來テ今城

ノといふべきをつづめたるならむにはただ今城ノ岳ニナクナリといふべく、コユ

ナリとまではいふべからず。さて今城^{フカ}岳は藤の多かりし處とおぼゆ

(且霧^{アサギリノ}八重山^{ヤハヤマ}越^{コユル}而^{ナリ}ほととぎす^{ナキテ}うの花^{コユラレ}邊から鳴^{ナキテ}越^{コユラレ}來

且霧八重山越而霍公鳥字能花邊柄鳴越來

上にアサガスマヤハ山コエテヨブコドリといへる歌あるによりて略解には「霧は霞の誤なるべし」といひ、古義も此説に従ひてアサガスマとよみ、訓義辨證下卷(二五頁)には

此歌霧にてもきこえぬにはあらねど猶此上にアサガスマヤハマコエテヨブコドリとあると全く同じつづきの歌なれば霞とせんこそよからめ。されど各本皆霧とありて霞とかける本はあることなし。故按ふに文字をば此まゝにてカスミとよむべきにや。然いふは承暦三年の鈔本金光明最勝王經音義といふ書に霧^{音武加}とあればなり。本集卷二に秋ノ田ノ穂ノヘニキラフアサ霞とあるも霧をカスミといへり。古へ霧と霞とは言の上にては春秋共に通はしいへることあれば文字もまた通はしかけるなるべし

といへり。上なる歌と同一ならざるべからざる理由なし。字のまゝにアサギリノと

よみて可なるにあらずや○結句を舊訓にナキテコユラシとよめるを契沖はコエケリに改め、略解はコエキヌに改め、古義は來を成の誤字としてコユナリとよめり。いづれにしても上に越而といひて更に越とはいふべきにあらず。案ずるに越而の而を衍字、來を良之などの誤として

あさぎりのやへやまこゆるほととぎすうのはなべからなきてこゆらし
とよむべし○カはヨリに同じ。古義にヨリの意なる例又ヨリと對用せる例を擧げたり。さればウノハナベカは山中ノ卯ノ花ノホトリヲといふ意なり○且は且、字は字の誤なり

木^コだかくはかつて木^コうゑじほととぎす來なきとよめてこひまさらしむ

木高者曾木不殖霍公鳥來鳴令響而戀令益

カツテは決シテなり。されば初二は決シテ高キ木ハ植エジとなり。子規は好みて高キ木にとまりて鳴くが故にしかいへるなり。結句の上に我ヲシテといふことを加へて聞くべし

あひがたき君にあへる夜△ほととぎすあだし時ゆは今こそなかめ
難相君爾逢有夜霍公鳥他時從者今社鳴目

第二句はキミアヘル夜ゾとあらではとのはず。夜の下に曾焉などの字をおと
したるならむ

このくれの暮闇なるに一云なればほととぎすいづくを家となきわたるらむ
木晚之暮闇有爾一云有者霍公鳥何處乎家登鳴渡良哉

コノクレは木陰なり。暮闇を古義にクラヤミとめれど舊訓の如くユフヤミとよむ
べし。卷四七七七頁に夕闇ハ路タツタヅシ、卷十一にも夕闇ノコノハガクレル月マ
ツガゴトとあり。○第四句はイヅクヲオノガ家トとなり。ココニトドマレカシとい
ふ意を含めり。○哉は武の誤なり

ほととぎすけさのあさけになきつるは君將聞可朝宿疑將寐
霍公鳥今朝之且明爾鳴都流波君將聞可朝宿疑將寐

四五を舊訓にキミキクラムカ、アサイカヌラムとよめるを略解に第四句のみキミ

キキケムカに改め、古義には結句をもアサイカネケムに改めたり。古義に従ふべし。
ネタリケムをネケムともいふべければなり。○且は且の誤なり

ほととぎす花橘の枝にゐてなきとよもせば花はちりつつ

霍公鳥花橘之枝爾居而鳴響者花波散乍

トヨモスは上なるキナキトヨメテのトヨムルにおなじ

うれたきやしこほととぎす今こそはこゑのかるがに來なきとよまめ
慨哉四去霍公鳥今社者音之干蟹來喧響目

ウレタキヤのヤは助辭にてウレタキはシコホトトギスにかかれり。イヤナホトト
ギスメといはむが如し。子規のなかぬを罵りていへるなり。語例は卷八家持の長歌
(二五四七頁)にあり。○カルガニは嗔ルバカリなり。上なるキナキトヨメテの例によ
ればこゝはキナキトヨメメといふべきなれど、かく來ナキトヨメメともいひなれ
しなり。トヨムはヒビク、トヨムルはヒビカスにて自他の別あるなり

この夜らのおぼつかなきにほととぎす喧△△奈流聲之音乃はるけさ

今夜乃於保束無荷霍公鳥喧奈流聲之音乃遙左

夜ラのラは助辭にて意なし。初二は今夜ノ暗クシテタドタドシキニとなり。四五を從來ナクナルコエノオトノハルケサとよめり。さて古義に

聲はなく聲につきていひ音は風響につきて云るか。又ただコエノハルケサとて事足れるを調のために音といへるか。オキベノ方或はコヌレガ上などやうにいへること多ければなり

といひ、中島廣足の櫃のくち葉卷三(八丁)に

こはめづらしきいひぎまなり。こは聲を體にしてオトは用にいへるなり。オトはヒビキといはんがごとし云々

といへり。案ずるにこは喧而去奈流聲之遙左とありしを誤れるならむ。くはしく云はば一本によりて音乃を聲之の傍に記したるがまぎれて本行に入りて十七言となれるよりさかしら人が而去の二字を削去りて今の如くなれるならむ。卷九にかきくらし雨のふる夜をほととぎすなきてゆくなりあはれその鳥とあるに似たる所あり

五月山うの花月夜ほととぎすきけどもあかず又なかぬかも

五月山宇能花月夜霍公鳥雖聞不飽又鳴鴨

ウノ花ヅクヨは古義にいへる如く卯花に月のさしたるをいへるなり。略解に「卯花のさかりなるは月夜の如く見ゆるをいへり」といへるは非なり。五月ノ山ノ卯花月夜ニ子規ノナクヲキシカドといふべきをテニヲハを略して上三句共に體言どもにしらべなしたる。範とはすべからず。キシカドといふべきを現在格にてキケドモといへる。これも今は許されねど集中には例多し。マタナカヌカモは又ナケカシとなり。略解に「不鳴と書べきを略し書るは集中例多し」といへれどセヨカシの意なるヌカモに不の字を添へて書けるは中々に集中に例なし。六二七頁及一九五二

頁参照)

ほととぎす來居裳鳴香わがやどの花橘のつちに落六見牟

霍公鳥來居裳鳴香吾屋前乃花橘乃地二落六見牟

第二句を舊訓にはキキテモナクカとよめり。古義の如くキキモナカヌカとよむべ

し。來居テモ鳴ケカシとなり。○落六見牟を宣長の『落左右手の誤か。オツルマデと訓べし』といへるは鳴香のナカヌカとよむべきに心附かざりし爲なり。雅澄が落六を落文の誤としてチルモとよめるもよろしからず。もとのまゝにてチラムミムとよむべし。子規のなく頃恰花橘の散るを子規の散らすやうに當時の歌人のいひならひし事卷八(一五四九頁)にいへる如し

ほととぎす厭時無あやめぐさかづらにせむ日こゆなきわたれ

霍公鳥厭時無菖蒲藪將爲日從此鳴度禮

略解に『いつとてもいとふ時はなけれども同じくは五月五日の比こゝに鳴わたれかしと也』と釋せり。さては第二句に辭足らねば厭時無はイトフトキナシならで外によみやうあるべきかとも思へど卷十八に此歌の重出せるに伊等布登伎奈之と假字書にしたればなほイトフトキナシとよみて略解の釋の如く心得べし

やまとにはなきてか來らむほととぎすながなくごとに無人おもほゆ

山跡庭啼而香將來霍公鳥汝鳴每無人所念

卷一にも

やまとにはなきてか來らむよぶこどりきさの中山よびぞこゆなる

とあり○ヤマトニハのハは軽く添へたるのみ。クラムはユクラムにおなじ。旅先にてよめるなり○無人は家人の誤ならむ

うの花のちらまくをしみほととぎす野出山入きなきとよもす

宇能花乃散卷惜霍公鳥野出山入來鳴令動

舊訓に野ニデ山ニイリとよめるを古義にヤマニリとよめり。ニにイの韻あればヤマニリとよみても可なり

橘の林を殖ほととぎす常に冬まですみわたるがね

橘之林乎殖霍公鳥常爾冬及住度金

第二句は舊訓の如くウエムとよむべし(略解にはウエツとよめり。ツネニといひて更に冬マデといへるなり。ガネはベクなり)

雨はれし雲にたぐひてほととぎす春日をさしてこゆなきわたる

雨晴之雲爾副而霍公鳥指春日而從此鳴度

初句は雨晴レテ山ニ歸ル雲ニといふべきを略せるなり。タグヒテは一ショニなり
○晴は晴又は霽の誤ならむ

物もふといねぬあさけにほととぎすなきてさわたるすべなきまで
物念登不宿且開爾霍公鳥鳴而左度爲便無左右二

イネヌアサケニは夜スガライネヌ曉ニとなり。サワタルのサは添辭、スベナキマデ
ニは得堪ヘヌマデニなり

わがころも君にきせよとほととぎす吾乎領袖に來居つつ

吾衣於君令服與登霍公鳥吾乎領袖爾來居管

第四句を舊訓にワレヲシラセテとよみ、古義に中山嚴水の説に従ひて領を領の誤
としてアレヲウナヅキとよめり。なほ後にいふべし○契沖は

尋常の鳥だに袖に來居るものにあらず。まして霍公鳥は人に馴ぬ鳥なれば此は
夏衣を竿に懸干せる其袖に來居てと云なるべし。さるにても君ニ著セヨト知ラ

スルと云意いかにも得がたし

といひ眞淵は右の説に枝を添へて

四句の乎は干の誤にて領は衣一領などいへばキヌと訓べければワガホスキヌ
ノ云々なるべし。此歌かけほしたる衣の袖に來るてなくといはんより外なし

といひ雅澄は中山嚴水の説を擧げて

領は領の誤なるべし。ワレヲウナヅキなるべし。吾乎は吾爾といふ意の古言なり、
さて領はうなづきてしらする意にて霍公鳥の鳴とき頭の動くがうなづくが如
くなれば云るなり。さて袖は契沖云る如く竿にかけてほせる衣なるべし

といへり。案ずるにこは子規の形を摺れる衣を人に贈るとて子規ガ吾袖ニトマリ
ツツ此衣ヲ君ニ贈レト我ヲ云々といへるなり。第四句の領は令の通用としてウ
ナガスとよむべし。孝徳天皇紀に凡京每坊置長一人四坊置令一人とありて令をウ
ナガシとよめり。又仁徳天皇紀十年に百姓不領とあるをウナガサレズシテとよみ
大寶令に國郡領送付領訖國司領送などあるを皆ウナガシとよめり。又天武天皇紀
十四年に周芳總令とあるはやがて總領にて欽明天皇紀四年に百濟郡令とあるは

やがて郡領なり。否總領郡領などは寧總令郡令と書くべきなり。かゝればいにしへ令と領とは通用せしなり。はやく續日本紀考證卷二大寶元年正月相樂郡令の下に郡令見欽明紀。令即領字。古或以音近借用之。天武記有周防總令所。即總領所也。案令領通用。通雅楊子曰。君子純終領聞。郝京謂。即令聞。

又同年四月田領の下に

貞觀三年二月田券有田領紀。直牧成。案欽明紀云。十七年秋七月云々。以葛城山田。直瑞子爲田令。田令此云陀豆歌毗。田領即田令。

と云へり

もとつ人、^{ホツ}霍公鳥乎八、^{ホト}希將見、^{ナガ}今哉汝來こひつつをれば

本人霍公鳥乎八希將見今哉汝來戀乍居者

略解古義にホトトギスヲヤメヅラシクイマヤナガコシとよみ、さて略解に

ほとゝぎすをさしてモトツ人といへり。集中(○)卷十七トホツ人雁ガ來ナカムとよめるトホツ人は雁をいへるにひとし。ヲヤはヨヤの意也と宣長いへり。呼かくる詞也

といひ、古義に

歌の意は昔の友にてある、やよほとゝぎすよ、汝にあひたしとこひしく思ひつゝ、居れば待しかひありてめづらしく今來りしやといふならむか

といへれど二三の句と今哉といふことゝ穩ならず。よりに案ずるに霍公鳥と希將見と入りかはり又今哉は吟哉を誤れるならむ。されば

もとつ人、希將見乎八、霍公鳥、吟哉汝來こひつつをれば

にてメヅラシキヲヤホトトギスナキヤナガコシとよむべし。上にもヨブコドリ吟八汝來とあり○さてヲヤはニ名詞を受くればナルニにかよふヲに無意義のヤの添へるにて當時行はれし一種の辭ならむ。卷四(七一五頁)なる

相おもはぬ人をやもとなしろたへの袖ひつまでにねのみしなかも
又上(一九七九頁)なる

相念はぬ妹をやもとなすがのねのながき春日をおもひくらさむ

のヲヤも今のヲヤとおなじきか。即ヤはナカモ、クラサムの下にめぐらして見べき疑辭にはあらで無意義の助辭なるか。こはなほ研究すべし○一首の意は

古キナジミハユカシキヲアハレナル子規ヨ、ワガコヒツツヲレバ汝ハ鳴イテ來

タカ、ヨクゾ鳴イテ來タ
といへるならむ

かくばかり雨のふらくにほととぎすうの花山になほかなくらむ
如是許雨之零爾霍公鳥宇之花山爾猶香將鳴
フラクニはフルニを延べたるなり

詠蟬

默然^モもあらむ時もなかなむ日ぐらしの物もふ時になきつつもとな
默然毛將有時母鳴奈武日晚乃物念時爾鳴管本名

初二は何モセヌ時ニ鳴ケカシとなり。モダの事は卷八(一六一〇頁)にいへり。結句は
アヤニクニナキツツとなり。卷四に

さよ中に友よぶ千鳥物もふとわびをる時になきつつもとな

卷八に

朝戸あけてものもふ時にしらつゆのおける秋はぎみえつつもとな

とあり○古義に題の蟬をヒグラシとよめるは非なり。常の如くセミとよむべし。日
ぐらしも蟬の一種なれば題には蟬と書けるなり。日ぐらしは卷八(一五三〇頁)に晚
蟬とかけり

詠榛

おもふ子が衣すらむににほひこそ島の榛原秋たたずとも

思子之衣將摺爾爾保比與島之榛原秋不立友

ハリに榛をかけるは借字にてこゝのハリは萩なり(三七頁及一〇〇頁参照)。略解に
『秋に成て此木の皮は剥なるべし』といへるは誤りてハンノ木と思へるなり○ニホ
ヒコソはニホヘカシにて花サケカシとなり。此句を見てもハンノ木にあらざるを
知るべし○島は大和高市郡の地名なり。卷七(一三四八頁)なる
時ならぬまだらのころもきほしきか島のはり原時にあらねども
といふ歌の處にくはしく云へり

詠花

風にちる花橘を袖にうけて爲君御跡思つるかも

風散花橘則袖受而爲君御跡思鶴鴨

第四句を舊訓にキミガミタメトとよめり。さて契沖は

君御爲或は御爲君とかきけむを傳寫を経て今の如くなれる歟

といひ略解には

君御爲跡と有つらんをあやまりて君の上へ爲の字の入しなるべし

といひ古義には君御爲跡と改めて

舊本に爲君御跡とあるはまぎれたるなるべし。今改めつ

といへり。キミガミタメトといふべき處にあらねば然よむべきにあらず。案ずるに
タテマツラムトとよむべし。即タテマツルを戯に爲君御とかけるなり。○思は舊訓
の如くオモヒとよむべし。古義にシヌビとよめるは第四句を誤り訓みてそれに合
せむと試みたるなり

かぐはしき花橘を玉にぬき將送妹はみつれてもあるか

香細寸花橘乎玉貫將送妹者三禮而毛有香

將送は舊訓にオクラムとよめり。略解は此訓に従ひて

こゝはオクレルといはずオクランといへるは病てつかれ居る時ゆるゑに贈り不

來歟といふなるべし

といひ古義にはオコセムとよみ改めて

いつものごとく吾におこし示すべきにさもなきはおもふに其妹はこのごろ病羸
であるにてもあらむかといふならむ

といへり。將送をオコセムとはよみがたければ、なほオクラムとよみて送來ラム妹

ノ送來ラムハの意とすべし。○ミツレは卷四に

ますらをとおもへる吾やかくばかりみつれにみつれ片もひをせむ

とあり。弱る事なり(七八一頁参照)

ほととぎす來なき響たちばなの花ちる庭を見む人やたれ

霍公鳥來鳴響橘之花散庭乎將見人八孰

略解古義に第二句をキナキトヨモスとよみたれどトヨモシとよむべし。トヨモシ
テの意にて花チルにかゝれるなり。ミム人やタレとは君コソ來テ見メとなり

わがやどの花橘はちりにけりくやしき時にあへる君かも
吾屋前之花橘者落爾家里悔時爾相在君鴨

アヘル君とは來リ訪ヘル君となり

見渡者向野邊乃なでしこのちらまくをしも雨なふり行年

見渡者向野邊乃石竹之落卷惜毛雨莫零行年

初二を從來ミワタセバムカヒノ野ベノとよみたれど瞿麥の散るは見渡して見ゆるものにあらねばミワタセバとよみてチラマクと照應せしむべきにはあらず。されば者を乃の誤としてミワタシノとよむべし

雨間開而國見もせむをふるさとの花橘はちりにけむかも

雨間開而國見毛將爲乎故郷之花橘者散家牟可聞

初句を從來アママアケテとよみたれどさる辭あるべくもあらず。間開はおそらくは霽の一字を誤れるならむ。さらばアメハレテとよむべし。○クニミモセムヲはここにては國見アリキモセムヲとなり。略解古義に國見を一處にゐて眺望する事と

心得たるより此歌を釋き煩へり。フルサトといへるは飛鳥ならむ

野邊みればなでしこの花さきにけりわがまつ秋はちかづくらしも

野邊見者瞿麥之花咲家里吾待秋者近就良思母

(吾妹子に)あふちの花はちりすぎず今さけるごとありこせぬかも

吾妹子爾相市乃花波落不過今咲有如有與奴香聞

ワギモコニは枕辭なり。チリスギズは散ラデなり。四五は今サケル如クイツモ盛デアレカシとなり

春日野の藤は散去而なにをかも御狩の人のをりてかざさむ

春日野之藤者散去而何物鴨御狩人之折而將挿頭

古義に「而は吉字などの誤か」といへるに従ひてチリニキとよむべし

時ならず玉をぞぬけるうの花の五月をまたば久しかるべみ

不時玉乎曾連有宇能花乃五月乎待者可久有

まづ略解には

上三句一三二と次第して見べし。時ナラズ卯花ノ玉ヲヌケルといふ意也。藥玉をぬくべき五月よりも先に四月にうの花を玉にぬけば時ナラズといへり
 といへり。抑ノに二種あり。たとへば花ノサクノノと花ノ枝のノとなり。干蔭はウノ花ノのノを花ノ枝のノとせるなれどこのノはかゝる處にては玉より下にはおくべからず。次に古義には

ウノ花ノ五月は卯花ノサク五月の意にて鶯ノ春○本書一九二三頁といふと同例なり

といへり。即ウノ花ノ五月ヲとつづけて心得たるなり。卯花は卯月の花なればウノ花ノ五月とはいふべからず。案ずるに上三句は卯花が枝にさき連れるを玉を貫けるに見立て、さて玉を貫くは五月のわざなればトキナラズといひサツキヲマタバヒサシカルベミといへるなり。さればウノ花ノのノは花ノサクノノにて主格の辭なり。ヒサシカルベミは待遠ナルベキニヨリテとなり

問答

うの花のさきちる岳ツツゆほととぎすなきてさわたるきみはさきつや

宇能花乃咲落岳從霍公鳥鳴而沙渡公者聞津八

サキチルのサキは例の如く軽く添へたるなり。上にも

ほととぎすなくこゑさくやうの花のさきちる岳にくすひくをとめ

とあり。サワタルは上(一九九六頁)にホトトギスナキテサワタルスベナキマデニと

あり

さきつやと君がとはせるほととぎすしぬぬにぬれてこゆなきわたる

聞津八跡君之間世流霍公鳥小竹野爾所活而從此鳴綿類

シヌヌは上(一九一七頁)に見えたり。初二は卷八なる

さきつやと妹が問はせるかりがねはまこととほく雲がくるなり

に似たり

譬喩歌

たちばなの花ちる里にかよひなば山ほととぎすとよもさむかも

橘花落里爾通名者山霍公鳥將令響鴨

略解に

本は妹許かよふにたとへ末は人にいひさわがれんといふにたとへたり
といへる如し。古義の釋は誤れり

夏相聞

寄鳥

春さればすがる成野のほととぎすほとと妹にあはず來にけり
春之在者酢輕成野之霍公鳥保等穗跡妹爾不相來爾家里

スガルは蜂の一種にて常の蜂よりは小さし。略解に「俗ジガバチといふものと見ゆ」
といへるは非なり。○略解に第二句をスガルナス野ノとよみて

春巢を借て生る故にスガルといふなるべし。ほととぎすも鶯の巢を借て生たて
ればカノ春ノスガルノ如クといふ意にてスガルナスとはいへるなるべし
といひ古義にもスガルナス野ノとよみて

成は古語にクラゲナス、螢ナスなど多く云るナスにて如の意なるべし。さて春サ
レバとあるを思ふに霍公鳥の春のころ巢だちてなく聲はかのスガルに似たる
故にスガルナスホトトギスといふ意につづきたるか

といへり。案ずるに春サレバスガル成は野の裝飾辭にて霍公鳥には與からず。成は
鳴などの誤としてナクとよむべし。○上三句はホトホトにかゝれる序なり。ホトホ
トは卷七(一四六四頁)にホトホトシクニ手斧トラエヌとあり。四五はスデノ事ニ妹
ニ逢ハズニ來ル所デアツタといふ意なり

ちつき山花たちばなにほととぎすかくらふ時にあへるきみかも

五月山花橘爾霍公鳥隱合時爾逢有公鴨

古義に

本句は序にて、、、さて人目をしのび隠るゝをりに思はず君にあひて思ふ心
を語らふ事も得爲すさても悔しやと云るか

といへるは非なり。五月山ノ花橘ニ霍公鳥ノ隱レテ鳴ク頃シモウレシクモ逢ヘル
君カナといへるなり。○上(二〇〇四頁)にも

わがやどの花橘はちりにけりくやしき時にあへる君かも

とあり○第二句と第四句との終の共にニなるが爲に調わるきなり

ほととぎす來なく五月のみじか夜も獨しぬればあかしかねつも

霍公鳥來鳴五月之短夜毛獨宿者明不得毛

寄蟬

ひぐらしは時となけども△我戀手弱女われは△不定なく

日倉足者時常雖鳴我戀手弱女我者不定哭

初二は日グラシハ己ガナクベキ時トナケドモとなり○第三句を略解古義には一本に物戀とあるに據りてモノコフルとよみ宣長は我を君の誤としてキミコフルとよめり。案ずるに於君戀の誤としてキミニコフルとよむべし(元曆校本及類聚古集には於戀とあり)下にも於君戀ウラブレラレバまた於君戀シナエウラブレとあり○手弱女は卷十六に多和也女と假字書にせるに據りてタワヤメとよむべし○結句は契沖が

我者の下に時の字落たる歟第六帥大伴卿宿次田温泉聞鶴喧作歌の落句に時不定鳴をトキワカズナクと點せり今も此と同じかるべき證には六帖にトキワカズナクとあり

といへり之に従ひて時の字を補ひてトキワカズナクとよむべし

寄草

人言は(夏野の草の)しげくとも妹と吾としたづさはりねば

人言者夏野乃草之繁友妹與吾携宿者

第二句はシゲクの枕辭なり。結句の下にウレシカラムといふばかりの意を略せるなり。古義に「タヅサハリネバといひのこしたるはヨシヤソレハサモアラバアレと云意を含ませたるなり」といへるは非なり。さる意は第三句の下にこそ補ひてきくべけれ

このごろの戀のしげけく夏草のかりはらへども生布如

迺者之戀乃繁久夏草乃苜掃友生布如

シゲケクはシゲカル事ハとなり○結句を舊訓にオヒシクガゴトとよめるを古義にオヒシクゴトシと改めたり。古義に従ふべし。卷十一にも

吾背子にわがこふらくは夏草のかりはらへども生及如

とあり。そのオヒシクは生類なり。略解に「及ぶ意」といへるは誤れり

まくずはふ夏野のしげくかくこひばさねわが命常ならめやも

眞田葛延夏野之繁如是戀者信吾命常有目八方

マクズハフ夏野ノはシゲクにかゝれる二句未滿の序なり。されば二三はカクシゲクコヒバとなり。サネはマコトニなり。吾命云云はワガ命長カラジとなり

吾のみやかく戀すらむ(かきつばた)にづらふ妹は如何將有

吾耳哉如是戀爲良武垣津旗丹類令妹者如何將有

初二は吾ノミカク戀スラムカとなり。ニヅラフは紅顔ナルとなり。結句を略解にイカニアルラムとよみ古義にイカニカアラムとよめり。古義の如くカをよみそふべくアラムはアルラムの意とすべし。アルラムをいにしへはアラムともいひき○此

歌次なる寄花のうちなりしがまぎれたるにかと思ふになほ然らじ。卷七にカキツバタの歌は寄草の中にも寄花の中にもあればなり○類令は類合の誤なり

寄花

片よりに絲をぞわがよる吾背子之花橋をぬかむともひて

片搓爾絲則曾吾搓吾背兒之花橋乎將貫跡母日手

片ヨリニヨルとは絲を合せずしてよるをいふならむ。代匠記に「片搓は片思の譬」といひ古義に「あひ手なしにからくして」と辭を補ひて釋ける共に従ひがたし○第三句を從來ワガセコガとよみさて古義に「吾夫子が家のうるはしき花橋の花を」と釋けり。上一九二八頁にも妹が家ノ梅を妹之梅といへる例あれどここは吾背子之を爲背子之の誤としてセコガタメとよむべし。セコガタメを爲背子之とは書くまじきに似たれど下にもコヒヌベシを可戀奴と書けり。又卷七にもシメシヨリを従標之と書けり○略解に寄花歌なれば花橋とあるは花をいへるなりと云へり

鶯のかよふ垣根のうの花のうき事あれや君が來まさぬ

鷺之往來垣根乃宇能花之厭事有哉君之不來座

卷八(一五四二頁)なる

ほととぎすなく峯の上のうの花のうき事あれや君が來まさぬ

と第三句以下全く相同じ○ウキ事アレヤは我ニ對シテオモシロカラヌ事アレバニヤとなり○略解に「鷺はくれども君は我をうしといとふ心あればにや君が來ぬと也」といへるは誤れり。上三句は無意の序なるのみ

うの花のさくとはなしにある人にこひやわたらむかたもひにして

宇能花之開登波無二人爾戀也將渡獨念爾指天

ウノハナノは卯花ノ如クなり。サクは女の靡くをたとへたるなり。略解に卷九(二七九四頁)なるフルノワサ田ノ穗ニハイデズを例に引きたれど彼と此とは同例にあらず

吾こそはにくくもあらめわがやどの花橘を見には來じとや

吾社葉憎毛有目吾屋前之花橘乎見爾波不來鳥屋

結句の格上(一九六九頁)なる七日シフラバ七夜コジトヤ又卷八(一五〇八頁)なる

やみならばうべも來まさじ梅の花さける月夜にいでまさじとや
に似たり

ほととぎす來なきとよもすをかべなる藤浪見には君は來じとや

霍公鳥來鳴動崗部有藤浪見者君者不來登夜

前の歌と四五句相似たれば並べて出せるならむ。一聯の歌にはあらず○契沖此歌を評して

雨のふる日ならば簀も笠も著でしとどにぬれて人來さすべき歌なり

といへり。此叟風情に昧からず

こもりのみこふればくるしなでしこの花にさきでよあさなさを見む

隱耳戀者苦瞿麥之花爾開出與朝旦將見

コモリノミはシノビテノミなり。ハナニは花トにてやがてナデシコノ花ノ如クとなり。サキデヨは表向ニセヨといふことをたとへたるなり○これも女の歌なり

よそのみに見筒戀牟^{ミツコヒナム}くれなるの末つむ花の色不出友^{イヒトクサ}

外耳見筒戀牟^{ミツコヒナム}紅乃未採花乃色不出友

第二句を契沖以下ミツツヲコヒムとよみたれどヲはよみそへがたし。宜しくミツツコヒナムとよむべし。○三四は色ニ出ヅの序なり。此序の例にこそかのフルノワサ田は引出づべけれ。○結句を從來イロニイデズトモとよめり。案ずるに友を而の誤としてイロニイデズテとよむべし。○筒は筒の誤、未は末の誤なり。

寄露

夏草の露別衣不著爾^{ツユワケキヌ}わが衣手のひる時もなき

夏草乃露別衣不著爾^{ツユワケキヌ}我衣手乃干時毛名寸

第二句を從來ツユワケゴロモとよみたれどさてはナツ草ノといふこと衣までかかるが上に、かの古今集雑上なる

きよ瀧の瀬々のしらいとくりためて山わけ衣おりて著ましを

の山別衣の如く露を分くる料に特製したる衣をいへるなりともおぼえねば訓を

改めてツユワケシキヌとよむべし。○第三句を舊訓にキモセヌニとよみ略解にキセナクニとよみて

キセナクニのセは老セヌ、タエセヌなどのセにひとしく古言なり

といへれどオイヌ、タエヌは自動詞にて上に承くる語なければ連用格を變じて名詞としてオイセヌ、タエセヌといふべけれど、キヌは他動詞にてこゝにては衣を承けたればキを名詞としてキセヌといふべからざる上に、キセヌといはば不令著とまぎれぬべし。又古義にはケセナクニとよみたれどキルをケヌといふは人の上にいふことなり。案ずるに不著爾はキタラヌニとよむべし。或は著の下に有の字ありしをおとせるか

寄日

みな月のつちさへさけててる日にも吾袖ひめや君にあはずして

六月之地副割而照日爾毛吾袖將乾哉於君不相四手

秋雜歌

七夕

あまのかは水△左閉而照舟竟舟人妹とみえきや
天漢水左閉而照舟竟舟人妹等所見寸哉

略解に

古本水の下底の字有しかれば二三四の句ミナゾゴサヘニテルフネノハテテフ
ナビトと訓べし

といひ古義にはミナゾゴサヘニヒカルフネハテシフナビトとよめり第二句は二
書に従ふべし。上(一九三一頁)にもノト河ノ水底サヘニテルマデニとあり次に第三
句はテラスフネとよむべく第四句は古義の訓に従ふべし○フナビトは牽牛イモ
は織女なり。ミエキヤは相見エキヤなり。こゝのハテシは他動詞なり

(久方の)あまのかはらに(ぬえどりの)裏歎ましつ乏まで
久方之天漢原丹奴延鳥之裏歎座津乏諸手丹

卷一軍王見山作歌(一二頁)にヌエコドリト歎居者とあり又此卷の下に

よしゑやしただならずともぬえ鳥の浦嘆居つげむ子もがも

又卷十七なる述戀緒歌にヌエ鳥ノ宇良奈氣之都追とあり。さて卷一なるト歎居者
を舊訓にウラナケヲレバとよめり。契沖は此訓に従ひて

奴要子鳥は子は添へたる字にて唯ヌエ鳥なり。ウラナケヲレバとは下なげく也。
高く聲をも立す喉聲にてつぶやくやうに啼鳥なれば我故郷を戀とて打うめか
るゝに喩て云へり。後にも今のごとく喩てよめる歌多し。或點にウラナキとある
は同じ心なれど第十に七夕の歌の中に二首今と同じく歎の字を用十七には奴
要鳥能宇良奈氣之都追とあればウラナケなり

といひ眞淵の冠辭考にはウラナキヲレバウラナケマシツウラナケシツツとよみ
て

こはかれが聲のかなしくうらめしげなるを人のをらびなくに譬ておけり。古事
記にアヲヤマニヌエハナキとよみ給ふも物おもふ時に此聲を聞いていよ愁ま
したまへる意なり○卷五にヌエ鳥ノノドヨビヲルニ云々これも哭にたとへた

る意は右に同じ。さて裏嘆とかきノドヨビともいへるをもて或人は隠聲になく鳥ならんといひしを、、よりておもふに和名抄に鵲怪鳥也とあれば梟などの類にて夜鳴ならん。且喉呼とも書るは隠聲なるにはあらでからざるに鳴かたにていふ也けり。ウラ鳴は恨鳴也

といひ、おなじ人の萬葉考に

鵲のなく音は恨をらぶが如きよし冠辭考にいひつ。人のウラナキは下シタに歎くにて忍音をいへり。然れば鵲よりは恨鳴といひ受る言は下歎なり

といひ、宣長の玉、小琴には

ト歎居者 本のまゝ(○ウラナケ)に訓べし

といひ略解にもウラナケとよめり。御杖の燈には「ウラナゲヲレバとよむべし」といへり。即ケを濁りてよめり。古義にも濁りてウラナゲとよみ、さて

ト歎浦歎など書るはともに借字、裏歎と書るぞ正字にてしのびに歎きてあらはさぬを云り、、裏はウラガナシ、ウラダハシなどのウラと同意なり。歎は字、意の如し。さればケの言濁て唱べし(但し十七に宇良奈氣之都追と氣の清音の假字

を用ひたるは正しからじ)

といへり。案ずるに眞淵の如くウラナキヲレバとよまば又ウラナキマシツ、ウラナキシツツとよまざるべからず。即此をウラナキとよみ彼をウラナケとよむべきにあらず。次にウラナケルといふ語あるべしともおぼえねば舊訓、契沖、宣長、千蔭の如くウラナケヲレバ、ウラナケマシツ、ウラナケシツツとよむべきにあらず。次にナゲキはもと長息の約なれば略してナゲとはいふべからず。されば御杖雅澄の如くウラナゲとよむべきにあらず。然らばウラナキヲレバとよむべきかといふに假字書なるを除きて三箇處ともに歎の字を書きて哭の字を書かざる事、卷十七に宇良奈氣とかける氣はキとよみがたき事以上二つの理由によればウラナキともよむべからず。されば字のまゝにウラナゲキとよみて卷十七なる宇良奈氣之都追は氣の下に伎をおとせりとすべし。本集には濁音の語に清音の字をあてたる例少からざればゲに氣を宛てたるは訝るに足らず。又ウラナゲキとよめば四箇處ともに八言の句となれどこれはた疚しとすべからず。さてそのウラナゲキは裏歎にてかのノドヨビとおなじく呻吟の意なり。眞淵が恨鳴の意としたるは非なり。ウラミを略し

てウラといふべけむや○結句の乏は哀などの誤としてカナシキマデニとよむべし○この歌は織女のさまをよめるなり

吾戀^{ワガコヒ}、孀^{ハシラ}者^{ハシラ}知遠^{ハシラ}ゆく船のすぎて來べしや事^{コト}毛^モ告^ツ火^ヒ

吾戀^{ワガコヒ}孀^{ハシラ}者^{ハシラ}知遠^{ハシラ}往船乃過而應來哉事毛告火

略解には第二句の知を一本によりて彌の誤とし又結句の火を哭の誤と認めてワガコフルツマハイヤトホク、コトモツゲナクとよみ、さて

イヌルを來ルといふ例有孀は借れるにて彦星をさす彦星ハ舟コギ出テ言ヲモノリ給フ事ナクテ彌遠クタダ過ニ過行ハナサケナシサハ過去ベキ事カハといふなり

といひ古義には初二を舊訓紀州本によりてアガコヒヲツマハシレルヲとよみ結句を眞淵の説によりてコトモツゲナクとよみ、さて

中山嚴水孀は彦星を云往船とはただ天漢を漕行舟にて彦星の舟にあらず過而は時過而の意なりワガ待ツツ戀ルコトヲ彦星ハヨク知給ヒヌルヲ舟ノ過往ゴトク時過テ來マスベシヤハモシ時過ムトナラバ事ノヨシヲ告來スベキニシカ

ジカト言モツゲ來ズテアレバ時過テ今更來座ベキヤウハナシといへるにてかのごぎ行舟を見て彦星の來り給ふにやと附添ふ女どものいふに答ふるさまなりといへり

といへり嚴水は第三句を枕辭とせるにや然らずやいとおぼつかなし舟ノ過往ゴトク時過テと釋せるを見れば枕辭とせるにてカノコギユク舟ヲ見テ彦星ノ來リ給フニヤト附添フ女ドモノイフニといへるを見れば枕辭とはせざるなり雅澄が今按に此説の如くならば往船之はただ天漢のちなみに枕辭の如くに云るものともすべきか

といへるはた事理に明なる言とは稱しがたし訓義辨證下卷二四頁には卷十三に二^レ火^ハ四^ハ吾妹とあるを例として結句をコトモツゲナムとよみ、さて按に火は南の意に借たるにてツゲナムと訓べきなり四句クベシヤはユクベシヤの意にて過テ往ベキ事カハ暫時ハトドマリ給へセメテ吾オモフ言ナリトモ告知センモノヲといふなり

といへり臨別の歌とせるは誤解なれど結句はげにツゲナムとよむべし又初二は

舊訓の如くワガコヒヲツマハシレルヲとよむべし。ユクフネノは枕辭にあらず。來
ベシヤはユクベシヤにおなじ。此歌は織女になりてよめるにて

ワガカク戀フル事ヲ彦星ハヨク知レルヲ今天ノ河ヲ舟ニテユクトナラバ傳言
ダニスベキヲ素通りニシテ往クベシヤ

といへるなり

あからひく色妙子イロタヘナルコしば見者人妻ミヤガゆるゑにわれこひぬべし

朱羅引色妙子數見者人妻故吾可戀奴

アカラヒクは集中にアカラヒク日モクルルマデアカラヒク朝ユクキミヲアカラ
ヒクハダモフレズテとあり。日と朝とにつづきたるは純粹の枕辭なれど肌につづ
きたるところなるとは准枕辭と認むべし。アカクニホフといふ意とおぼゆ(古義に
はヒを濁りてアカビカルの約とせり)○第二句を舊訓にシキタヘノコヲとよめる
を契沖はイロタヘノコヲに改め眞淵、千蔭、雅澄は舊訓に従へり。さて冠辭考には
アカラヒクシキタヘノコヲ云々こは子につづけて上の赤ネサス君てふに同じ。
色妙は借字にて下に擧るシキタヘノ妹といふに同じく敷細布てふ意也。さてそ

の敷は物の繁くうつくしきをいひ細布もよき絹布をいふ古語にて女のうつく
しく和なごやかなるに譬へたる語也

といひ、古義には

シキタヘノコは十三にもヤマトノツゲノヲグシヲオサヘサス刺細、子ソレゾワ
ガツマとあり。刺細は敷細の誤なればこも舊本にシキタへとよめる、よろし。二
卷に色妙乃枕トマキテとあるをも考合べし。シキは重浪シキナミのシキにてタへは微妙
なる謂ならむ。美女を稱ていふなるべし

といへり。色妙をシキタヘノとよみて子にかゝれりとせむには枕辭と認めざるべ
からず。既にアカラヒクといふ枕辭を戴き更にシキタヘノといふ枕辭を戴くべき
ならむや思ふべし。これのみにてシキタヘノとよむべからざる事明なれば其上は
云ふにも及ばざる事なれど尙云はむに冠辭考に例として引けるシキタヘノ妹は
卷二に敷妙ノ妹ガタモトヲとあるを云へるにてそのシキタヘノは眞淵自も(シキ
タヘノの下に)「こは語を隔てタモトにつづく」といへるにあらずや。又古義に卷十三
なる

みなのわた、かぐろき髪に眞木綿もち、ざねゆひ垂り、やまとの、つげの小櫛を、おさへさす、刺細の子は、それぞわがつま

の刺を敷の誤として今の例とせるは妄とも妄なり。刺はおそらくは腰の字の誤ならむ。なほ彼處に至りていふべし。然らば契沖の如くイロタヘノ子ヲとよむべきかと云ふに語法上イロタヘノ子とはいふべからず。宜しくイロタヘナル子とよむべし。さて初二はクレナキノ色ウツクシキ子といへるなり。○シバは屢なり。見者を從來ミレバとよみたれどミナバとよまではコヒヌベシと照應せず。人妻ユエニは人ノ妻ナルニとなり(卷七二頁^{一三八} 参照)○此歌は略解古義にいへる如く元來七夕の歌にあらざるがまぎれてこゝに入れるなり

あまのかは安のわたりに船うけて秋立まつと妹につげこそ

天漢安渡丹船浮而秋立待等妹告與具

支那傳説の銀河と我傳説の天、安河と相似たる所あればわざと相混じてアマノカハヤスノワタリニといへるなり。ワタリは渡津なり。○第四句を舊訓にアキタチマツトとよみ、眞淵は立をタツとよみ改め、宣長は秋を我の誤としてワガタチマツト

とよめり。さて略解古義共に宣長の説に従へり。案するにこは眞淵の説に従ふべし。ワガタチマツトとよまむに待つべきものをいはでは物足らず又タチは不用なればなり。アキタツマツトとよみて秋ノ立ツヲ待テリトの意とすべし。さてこは風雲などにおほせたるなり。○與具は與其の誤、與のみにてコソとよむべきを更に其を添へたるか。其をソに借れる例は卷四にイヅクノコヒ其^七七七○夏イヅレノイモゾ(七七六頁)とあり。下にもそれとおぼゆる例あり

蒼天^{ホソラ}ゆかよふわれすらが故^{アツカサ}に天漢道^{チナミチ}なづみてぞこし

從蒼天往來吾等須良汝故天漢道名積而叙來

牽牛が織女に告ぐる趣なり。第四句を舊訓にアマノカハミチとよみ、契沖は卷十四にカミツケノヲドノタドリノ可波治ニモとあるを例としてアマノカハヂヲとよめり。契沖の訓に従ふべし。卷二(三一三頁)に川瀬ノ道とあるも同意なり。○ナヅミテはナヅサヒテにひとし(卷九二頁^{一七六} 参照。一首の意は

大空ヲ飛ブ通力アル我ナレド汝ニ心底ヲ見セムトテ辛苦シテ天ノ川瀬ノ道ヲ渡ツテ來タ

といへるなり

八千戈の神の御世よりともしづま人しりにけり告思者ツギテシモヘバ

八千戈神自御世乏嬬人知爾來告思者

初二はただ遠キ昔ヨリといはむにひとし(卷六四一八 参照)さて

ともし妻人しりにけり八千矛の神の御世より告思者

と句をおきかへて心得べし。トモシヅマはユカシキ妻なり。卷八(二六二一頁)にもナ

ク鹿ノ如トモシカモワガココロ妻とあり。略解に

トモシヅマはたまたま逢てめづらしみおもふ意

といひ、古義に

年に一度ならでは相見る事なければ見る事の稀に乏しき妻と云なるべし

といへるは非なり。○結句を舊訓にツギテシオモヘバとよみ略解に

告は借れるにて意は繼也。卷三長歌語告もカタリツギと訓べければこゝもツギ

とよめり

といへり(古義にもツギテシモヘバとよめり)げに卷三四一五頁山部赤人望不盡山

歌に語告イヒ繼ユカムとありてカタリツギとよむべくおぼゆ。但告の今の活は下

二段にてツギとはたらかねばツギに告の字を借るべくはあらず。よりに思ふに告

はいにしへ四段にはたらしならむ。一説に告は苦の誤にてネモコロニモヘバな

りといへれど八千矛ノ神ノ御世ヨリを受けたればツギテといはむ方まさるべし

わがこふる丹穂テハの面オモテこよひもかあまのかはらに石枕イソフツマカム卷

吾等戀丹穂面今夕母可天漢原石枕卷

ニノホは赤土ノニホヒなり。面を舊訓にオモハとよめるを略解古義にオモワに改

めたれどオモワは顔の輪廓なればオモテとよむべし。さてニノホノオモテはやが

て紅顔なり。卷五(八六一頁)にもニノホナス、オモテノウヘニ、イヅクユカ、シワカキタ

リシとあり。○二三の間にソノ人トといふことを挿みてきくべし。コヨヒモカのも

は助辭にてコヨヒカといはむにひとし。○石枕は舊訓の如くイソマクラとよむべ

し。イソは大石なり(卷九三頁)参照。結句は古義に従ひてイソマクラマカムとよむ

べし

己嬬オソツマフ、乏子トモシム等者、竟津荒磯卷マキ而寐マ、君まちがてに

己嬾乏子等者竟津荒磯卷而寐君待難

初二を舊訓にオノガツマトモシキコラハとよみたれどトモシムといはでは語脈とほらず。略解にはシガツマノトモシキコラハとよみたれど己をシガとよむべからざる事は卷九(一七四七頁)にいへる如し。宜しくオノヅマヲトモシムコラハとよむべし。宣長はオノガツマトモシムコラハとよめり。それもあしからず。トモシムはユカシガルにてやがて戀ふるなり。子ラは織女を指せり。○第三句を舊訓にアラソヒツとよみ眞淵が立見津の誤としてタチテミツとよめる共に由なし。宣長はハツル津ノとよめり。更に一步を進めて古義の如くハテム津ノとよむべし。君ガ舟ノ泊テム津ノとなり。終の意なる竟を泊に借れるなり。卷七(一二八三頁)にも大御舟竟而サモラフとあり又上(二〇一八頁)にも竟舟人妹ト見エキヤとあり。○第四句を宣長がアリソマキテヌとよみ雅澄が之に従へるはわろし。略解の如くアリソマキテヌムとよむべし。○マチガテニは待敢へズにて即待兼ネテなり。君といへるは牽牛なり。此歌は第三者としてよめるなり。織女になりてよめるにあらず。

天地とわかれし時ゆ自嬾然叙手而在金まつ吾は

天地等別之時從自嬾然叙手而在金待吾者

三四を従來オノガツマシカゾテニアルとよみたれどさては何の意ともきこえず。略解に「四の句誤字あらん。解がたし」といへるは率直なり。案するに手を持たなどの誤字、在を衍字としてオノヅマトシカゾタノミテとよむべし。シカゾはカクゾなり。

彦星なげかすつまにことだにも告余叙來鶴見者苦彌

彦星嘆須嬾事谷毛告余叙來鶴見者苦彌

初句を舊訓と略解とにはヒコボシノとよみ契沖と雅澄とはヒコボシハとよめり。後者に従ふべし。○第四句を舊訓にツゲニヅキツルとよみ又異本に余を爾に作れるによりて契沖以下皆余を爾の誤とせり。案するにコトダニモを受けたればツゲムトヅキツルとあらざるべからず。否ノラムトヅキツルとよむべし。されば余を等の誤とすべし。コトダニモノラムは話ナリトモセムとなり。卷九詠永江浦島子歌(一七四四頁)にチチハハニコトモノラヒとあると参照すべし。○結句を従來ミレバクルシミとよみたれどさては意通せず。宜しく見の上に不の字を補ひてミズバクルシミとよむべし。○一首の意は

彦星ハ嘆カス妻ニ相寢ル事ハカナハズトモ話ナリトモセムトテ來ツ見ネバツ
ラキニヨリテ

といへるなり

(久方の)あまつしるしと水無河へだてておきし神世しうらめし

久方天印等水無河隔而置之神世之恨

アマツシルシのシルシは畫なり。莊子人間世に畫地而趨とあり孫子虛實に雖畫地
而守之云々とあり文選の西京賦に畫地成川とあるシルシなり。こゝに天印とかき
下なる長歌に天驗とかけるは共に借字なり。後世の歌にアマノオシデとよめるは
この天印を誤讀せるなりと契沖及濱臣(答問雜稿)おどろかせり。○ミナシ何といへ
るは天上の河なればしか云へるにや。ミナシ河は卷四に水瀬川、卷十一に水無瀬川
と書きたればミナセ河ともいひしなり(アナシ河をアナセ河ともいふ如く)。但こゝ
は水無と書きたればミナセとはよみがたし

(ぬばたまの)宵霧隠遠くとも妹傳△はやくつげこそ

黒玉宵霧隠遠柄妹傳速告與

略解古義にヨギリゴモリテとよみたれど下なるヌバタマノ夜霧隠トホヅマノ手
ヲはヨギリガクリテとよまざるべからねばこゝもヨギリガクリテとよむべし。道
ガ夜霧ニ隠レテといふ意なり。道といふことを略せるなり。さて霧に隠れたりとも
道の遠近はかはるべからねど霧たてば道たどどしくて恰道の遠きが如くに時
費ゆればしばらく借りてトホクトモといへるなり。○第四句を舊訓にイモガツタ
へハとよめるを古義に言の字のおちたるなりとしてイモガツテゴトとよめるは
卓見なり。卷十九なる長歌にも玉梓ノ道クル人ノ傳言ニ吾ニ語ラク云々とあり

汝がこふる妹の命は飽足爾袖ふるみえつ雲がくるまで

汝戀妹命者飽足爾袖振所見都及雲隱

第三句を舊訓にアクマデニとよめるを略解にはアキタリニとよみ、古義には足を
迄の誤字として再アクマデニとよめり。古義に従ふべし。○此歌は第三者としてよ
めるなり。結句は汝彦星ガ別レ去リテ雲ニ隠ルルマデとなり

ゆふづつ毛かよふ天道をいつまでかあふぎてまたむ月人をとこ
夕星毛往來天道及何時鹿仰而將待月人壯

月人ヲトコヲ待タムとなり。初句の毛を古義に之の誤字とせり。こは待つ事久しうして長庚の運行も感知せらるゝ趣なればなほ毛とあるべし。古義に

此歌は月を待歌なるがまぎれて七夕の歌の中に入たるならむ

といへる如し。契沖は「月人ヲトコは牽牛の異名と聞ゆ」といひたれどアフギテマタムとあれば地上の人の空を仰げるにて織女が牽牛を待てる趣にあらず

あまのかは已むかひたちて戀等△爾ことだに將告嬬言及者

天漢已向立而戀等爾事谷將告嬬言及者

第二句の已を己と見誤り又卷十八にヤスノカハ許牟可比太知氏とあるに誤られて舊訓及略解に第二句をコムカヒタチテとよみたれどコムカヒといふ語は無し。己の音はイなり。されば活語雜話卷二の四十一丁及古義に従ひてイムカヒとよむべし。現に集中にミヅトリノタチノ已蘇伎爾またカヒリクマデニ已波比丑マタム

(共に卷二十)など己をイの假字に用ひたり。○第三句を舊訓には字のまゝにてコフラクニとよみ、略解には等を樂の誤としてコフラクニとよみ、古義には等爾を從者又は自者の誤としてコヒムヨハとよめり。宜しく戀等六爾の脱字としてコフラムニとよむべし。ラムを等六と書ける例は卷一(一〇頁)にアサフマス等六ソノクサフカヌ又卷七(一二七頁)にカミヨニカイデカヘル等六とあり。さてコフラムニは織女ガ戀フラムニと云へるなり。○第四句は從來コトダニツゲムとよみたれど、さては意通せず。コトダニツゲナムと八言によむべし。牽牛に對して便ダニシテヤレと勸むるなり。○結句を舊訓にはツマトフマデハ、略解にはツマトイフマデハとよみ、古義には言を元曆校本に奇とせるに據りて寄の誤としてツマヨスマデハとよめり。古義の説宜しき如くなれどツマヨスと云はむとには卷九(一六九一頁)なるツマノ社ツマヨシコサネの如くツマを寄する者(此歌ならば風などを擧げてそれに對してコトダニ告ゲナムと云へるやうにせざるべからず。又假に風などいふ事を略したりとしてもコトダニツテヨと云はざるべからず。されば嬬言の言はもとのままとし、及を柄の誤としてツマトイフカラハとよむべきか

しら玉のいほつとどひを解もみず吾者干可太奴あはむ日まつに
水良玉五百都集乎解毛不見吾者干可太奴相日待爾

略解に「干は在の誤にてアリガタヌか」といひ、古義に

白玉の五百つ集の手玉を装ひ飾てかたちづくりして今か今かと彦星の來座て
あはむ日を立待によりてその飾の手玉を再び解て試むることをも得せず心を
安むる間もなくして待に在にも在られず堪がたしとなるべし

といへり。案ずるに干はげに在の誤ならむ。太はテとよむべし。卷七に安太へユクヲ
ステノ山ノ、卷十二にイトノキ太ウスキ眉根ヲとあればなり(一三一九頁参照。さて
アリガテズといはでアリガテヌといへるはアリアヘヌコトヨといふ意なればな
り。卷十四にもフルユキノユキスギ可提奴イモガイヘノアタリとあり。○トキモミ
ズは手に巻きたるを解きも見ずといふ事かと思へどなほ穩ならず。解は卷の誤に
あらざるか

あまのかは水陰草のあき風に靡見者時きたるらし

天漢水陰草金風靡見者時來之

水陰草を舊訓にミヅカゲグサとよめるを眞淵は陰を隱の誤としてミゴモリグサ
とよみ、さて

祝詞に水分をミクマリともミコモリとも訓如くみなまたに生たる草をいふ也
といひ雅澄は之に従へり。隱とある本あればそれに従ひてミゴモリグサとよむべ
し。但ミゴモリグサは水中に生ひたる草とすべし。祝詞の水分は配水にて水派の意
にあらず。○第四句を古義にナビカフミレバとよめり。舊訓の如くナビクヲミレバ
とよみて可なり。○こは織女になりてよめるなり。されば時の上に彦星ノ來タマハ
ムといふことを添へて心得べし

わがまちしあきはぎさきぬ今だにもにほひにゆかなをち方人に
吾等待之白芽子開奴今谷毛爾實比爾往奈越方人邇

此歌の今ダニモは今カラナリトモなり。即下なる

露霜にころもでぬれて今だにも妹がりゆかむ夜はふけぬとも

のイマダニモにおなじ(卷九〇一頁四参照。夕方にふと萩のさきたるを見附けて今カ

ラナリトモといへるなり。さて萩のさけるを見て妹がり行かむと思立ちぬるは妹に逢ふべく定まれる時節なればなり。○ヲチカタ人は即遠妻にて織女をさせるなり。ニホフは染マルなり。但こゝにては色に染まるにあらで香に染まるなり。宣長雅澄がニホヒをナマメキと釋せるは從はれず

わがせこにうらごひをれば天の河夜船こぎとよむ梶の音きこゆ

吾世子爾裏戀居者天河夜船撈動梶音所聞

ウラゴヒは心ニ戀ヒなり

まけながくこふる心ゆあき風に妹音きこゆ紐とき往名

眞氣長戀心自白風妹音所聽紐解往名

マケナガクはケナガクにマの添へるにてケナガクは久シクなり。心ユは心ヨリなり。○妹音は梶音の誤なる事しるし。○往名を宣長は待名の誤としてマタナとよみ雅澄は枉名の誤としてマケナとよめり。卷十一にユフカタマケテを夕方枉とかけり。○卷八(一五五五頁)に

あまのかはあひむきたちてわがこひし君きますなり紐ときまけな

又下に

あまのかは川門にたちてわがこひし君きたるなり紐ときまたむ

とあり

こひしくはけながきものを今△谷ともしむべしやあふべき夜だに

戀敷者氣長物乎今谷乏牟可哉可相夜谷

コヒシクハはコヒシカル事ハとなり。卷十八にも戀之久爾イタキ吾身ゾ云々。卷二十に故非之久能オホカルワレハミツツシヌバムとあり。トモシムベシヤは飽クバカリモノセザラムヤとなり。○第三句を從來イマダニモとよみたれどこは今夜谷とありし夜をおとせるにてコヨヒダニとよむべし。結句は第三句を反復せるなり。否第三句にアフベキコヨヒダニといふべきをさは云はれざるによりてまづ第三句にコヨヒダニといひ更に結句にアフベキ夜ダニといへるなり。古義に「今ナリトモ心ダラヒニ速ク相見ムとなるべし」といへるは夜を脱せるに心づかざりしにて又「谷ニありていかが」といへるは互文なる事を悟らざりしなり

あまのかはこそこの渡、伐遷へば河瀬ふむに夜ぞふけにける
天漢去歳渡伐遷閉者河瀬於蹈夜深去來

彦星が天河を徒渉する趣によめるなり。渡伐を契沖干蔭はワタリバとよみたれど場は當時はニハといひていまだバといはねばしかよむべきにあらざる事明なり。古義には伐を代の誤として(類聚古集には代とあり)ワタリデとよみて應神天皇紀の歌にチハヤビトウヂノワタリニ和多利涅瑠とあるを例に引きたれど此歌古事記には和多理是邇とありて紀の涅は果して誤字ならざるか、即果してワタリデといふ語ありやいまだ確ならぬ事なれば之に據りて今を定めむは頗危し。案ずるに伐を代の誤とし代遷閉者をウツロヘバとよみ渡にノをよみ添ふべし、ウツロヘバはカハレバなり○河瀬はカハノセとよむべし。從來カハセヲとよみたれどカハノセとよまむ方調まされり。第四句のフムはよくつかひたり。たどり渡るさま此一語にてあらはれたり

自古舉而之服不願天河津爾年序經去來

古義に

往古より機にはあげおきたれども彦星をこひしく思ふ心の切なる故に天、河津にのみ立出て其機物をかへりみずして年ぞ經にけるとなり
と釋せる如し

天のかは夜船をこぎてあけぬともあはむと念ふ夜、袖かへず將有△
天漢夜船撈而雖明將相等念夜袖易受將有

將有を舊訓にアレヤとよめり。契沖は此訓に基づきて「落句の終に哉の字あるべし。落たるにや」といへり。然るに干蔭はもとのまゝにてアラムとよみ雅澄は哉を補ひてアラメヤとよめり。ソデカヘズアラメヤとよめば九言となりて調わるれば舊訓の如くアレヤとよむべし。さて四五は逢ハムト思フ夜ナルヲ袖ヲカハサザラムヤといへるなり。カハシをカヘといへるは玉手サシカへの類なり
とほづまと手枕易ねたる夜はとりがね莫動あけばあくとも

遙嬬等手枕易寐夜雞音莫動明者雖明

トホヅマは上なるヲチカタ人とひとしくて即織女なり。第二句を舊訓にタマクラカヘテとよめるを古義にカハシに改めたれど略解に「上の袖カヘテと同じくカハシテ也」といへる如くなれば舊訓に従ふべし。卷五(八六四頁)卷八(二五五七頁)にも玉手サシカハシを玉手サシカヘといへり。○第四句は舊訓にトリガネナクナ、略解古義にトリガネナキとよみたれどトリガネナトヨミと八言によむべくや。○嬬は異本に嬬とあり。嬬は醜婦、嬬は老嫗の貌にて共に穩ならず。嬬又は嬬の誤か。

相見久あきたらねどもいな(の)めの(あ)けゆきにけりふなでせむいも

相見久厭雖不足稻目明去來理舟出爲牟嬬

初句を舊訓と古義とにアヒミマクとよみたれど略解に従ひてアヒミラクとよむべし。さてアヒミラクは相見ル事ガとなり

さねそめていくだもあらねばしろたへの帯乞ふべしや戀もつきねば
左尼始而何太毛不在者白栲帶可乞哉戀毛不遏者

サネツメテは寝ソメテなり。イクダモアラネバはイクバクモアラヌニなり。卷五(八六四頁)にもマタマデノ玉手サシカヘ、サネシ夜ノ、イクダモアラヌニとあり。但こゝは一夕の事なり。略解に

イクダはイクバクの略也。ココダクをココダといふに同じ
といへるは何の意か。イクバクを略してもイクダとはならざるにあらずや。○コヒモツキネバは戀モ盡キヌニなり。下にもあり。このネバも上のネバも全く相同じ。古義に

不在者は字の意の如し。次のツキネバはツキヌニの意にて異なり
といへるは誤解なり。元來サネソメテイクダモアラズ戀モツキヌニシロタヘノ帯ヲ乞フベシヤといふべきをしらべわけたれば聊きこえにくきなり。○三四は契沖が

きぬぎぬになる時其帯取て給はれと織女に乞べしやはとなり
といへる如し。寫實に過ぎてなつかしからず

よろづ世にたづさはりゐてあひみともおもひすぐべき戀ならなくに

萬世携手居而相見 軀念可過戀 奈有莫國

アヒミトモは相見ルトモなり。オモヒスグは思止ムなり。○奈は余の誤ならむ
よろづ世にてるべき月も雲がくりくるしきものぞ將相登雖念△
萬世可照月毛雲隱苦物叙將相登雖念

雲ガクリはこゝにては雲ガクレテといふ意にはあらで雲ガクレスルハといふ意
ならむ。クルシキはワビシキなり。○結句を字のまゝにアハムトモヘドとよみては
一首の意通せず。雖念は念者の誤ならむか。さて一首の意は萬世ニ逢フベキ契ナガ
ラ妹ニ逢ハムト思ヘバシバシノ障モツラキモノゾといへるにや

白雲のいほへ隠カクレテとほけどもよひさらず見む妹があたりは
白雲五百遍隱雖遠夜不去將見妹當者

隱を略解古義にカクリテとよみたれど舊訓の如くカクシテとよむべし。ヨヒサラ
ズは毎夕なり

わがためとたなばたつめ之ガそのやどに織オリ白布シロハ織オリ豆マメけむかも

爲我登織女之其屋戸爾織白布織豆兼鴨

之はガとよむべし。從來ノとよめり。第四句を古義にはオレルシロタへとよめり。こ
こはオレルといふべき處にあらず。オルシロタへハとよむべし。織豆を古義に織豆
の誤とせるは妄なり。もとのまゝにてオリテとよむべし。織上ゲタラウカとなり。略
解にケムカモのケに濁をさしたるはわろし。すみてよむべし

君にあはず久時ヒサシクナリヌ織服オリキセシしろたへヒサシクナリヌごろも垢カづくまでヒサシクナリヌに

君不相久時織服白袴衣垢附麻豆爾

第二句を從來字のまゝにヒサシキトキニ、ヒサシキトキユなどよめり。久成奴また
は久成宿の誤としてヒサシクナリヌとよむべし。○第三句を略解古義にオルハタ
ノとよめるは非なり。オリキセシとよむべし。○略解に織女になりてよめりといひ
古義に織女のいへる意にやといへるも非なり。無論牽牛の語なり

あまのかは梶トの音トきこゆトひこ星トとたなばたつめとこよひあふらしも
天漢梶音聞孫星與織女今夕相霜

秋されば河霧△あまの川河にむきゐてこふる夜ぞおほき
秋去者河霧天川河向居而戀夜多

第二句に落字ある事明なり。千蔭は後撰集にカハギリワタルとあるによりて渡の字を補ひたれどタチワタルとこそいふべけれど、ただワタルとはいふべからず。古義には古寫本に據りて立の字を補ひてカハギリワタルとよめれど、はタツといふべき處にてタテルといふべき處にあらず。雅澄は一時の現在のと繼續の現在のと別を知らざりし如し。案ずるに河霧々の々をおとせるにてカハギリキラス又はカハギリキラフとよむべし。河といふ語の三たび出でたるはわざと重ねたるなり。よしゑやしたただならずともぬえどりの浦嘆居つげむ子もがも

吉哉雖不直奴延鳥浦嘆居告子鴨

ヨシエヤシはヨシヤにおなじ。タダナラズトモは古義にタダニ逢ハズトモの意なりといへる如し。或は雖不直の下に相の字をおとせるにてもあるべし。略解にタダニイハズトモと譯せるは誤解なり。第四句はウラナゲキヲリトとよむべし。二〇一

九頁參照。ワガ心ニ嘆イテヲルト夫ニ告ゲム人モアレカシといへるなり。織女の話なり

一とせになぬかのよのみあふ人の戀もつきねば夜はふけゆくも

一云さよぞあけにける

一年邇七夕耳相人之戀毛不遏者夜深往久毛

一云不盡者佐宵曾明爾來

上にもシロタヘノ帯コフベシヤ戀モツキネバとあり。底本の夜深往久毛を略解に又ヨフケユカクモとよめるは非なり。ユカクはユクコトといふことなり。濫にユクを延べてユカクといふにはあらず

あまのかは安川原定而神競者磨待無

天漢安川原定而神競者磨待無

此歌一首庚辰年作之

右柿本朝臣人麿歌集出

舊訓には

あまのかはやすのかはらのさだまりてこころくらべはときまつなくにとよみ、略解には「競集同じ意に落れば」とて第四句をカムツツドヒハとよみ、結句をトキマタナクニとよめり。又宣長は

或人説に而は西の字の誤、競は鏡の誤にてヤスノカハラニサダメニシカミノカガミハトグマタナクニと訓べし。これは月を神代の鏡に見なして此鏡ハ磨事ヲマタズシテイツモクモラヌといふ也

といひ、雅澄は

今強ておもふに神競は競字舊本の訓に従てツドヒと訓まむか。競字はあらずひあつまる義をめぐらしてツドヒと訓せたるならむ。つどふは集ることなればなり。さて磨待は禁時の誤にて第三句以下はサダマリテカミノツドヒハイムトキナキヲと訓むか

といへり。案ずるに磨待を度時の誤として

あまのかはやすのかはらはさだまりて神のきはへばわたるときなし

とよむべし。初二は天上ノ河ナル安、河原ハとなるべし。天漢は天有哉の誤かとも思へど下なる長歌にも天漢安乃川原乃とあれば誤にはあらず。第四句の競は第三句のサダマリテを受けたれば動詞ならざるべからず。よりて神ノキホヘバとよめるなり。キホヘバは舟競スレバとなり。フナギホヒは卷一(五九頁)にも卷二十にも見えたり。○此歌は牽牛の語なり。庚辰は天武天皇の白鳳九年なるべしと契沖いへり。○白鳳九年はただ九年とあるべし)

たなばたの五百機たてておる布之秋去衣たれかとりみむ

棚機之五百機立而織布之秋去衣孰取見

イホハタはあまたの機なり。機織は此神女の業とする所なり。さるから織女といひタナバタツメといふなり。○秋去衣は字のままならば無論アキサリゴロモとよむべし。さて契沖は

春ハ來ニケリと云事を春サリニケリとよめるやうに秋來テノ衣と云意に名付たり。裕と云説あり。然るべし

といへり。然るに秋著る衣を秋サリゴロモといはむは穩ならねば宣長は

秋去は和布の字の誤にてニギタヘゴロモならん

といひ雅澄は之に従へり。案ずるに第三句の之を乎の誤とし秋去衣を秋去來者の誤としてオルハタヲアキサリクレバとよむべし。右の誤字に據りて後世アキサリゴロモとよみならへるはにがし〇タレカトリミムを契沖は彦星こそ取見めの意なり」といひ略解には彦星ならで誰か著ても見んといふ也」といひ古義にも彦星ならで孰か取見て服むぞと云るなるべし」といへり。案ずるにトリミルの語例は卷五(九五七頁)に

國にあらば父とりみまし家にあらば母とりみまし

又(九六四頁)

家にありて母がとりみばなぐさむるころはあらまし死なば死ぬとも

卷七(一三五二頁)に

ことしゆくにひ島守が麻ごろも肩のまよひはたれかとりみむ

とありて世話する事なり。今は秋ニナレバ彦星ヲ待ツトテ他事ヲ顧ミネバ機ノ世話ハ誰ガスルダラウといへるなり。上なるイニシヘユアゲテシハタヲカヘリミズ

云々と相似たる意なり

年において今かまくらむ(ぬばたまの)夜霧隠とほ妻の手を

年有而今香將卷烏玉之夜霧隠遠妻手乎

トシニアリテの語例は卷十一に

大船にまかぢしじぬきこぐ間だに極太こひし年にあらばいかに

卷十五に

等之爾安里豆ひとよいもにあふひこぼしもわれにまさりておもふらめやも

とあり。一年中待チテといふ意なり。〇第四句を略解古義にヨギリガクリニとよみたれど本集に雲ガクリ、磯ガクリなどいへる皆雲ニ隠レテ、磯ニ隠レテなどいふ意なればこゝも夜ギリガクリテよむべし

わがまちし秋はきたりぬ妹與吾なに事あれぞ紐とかざらむ

吾待之秋者來沼妹與吾何事在曾紐不解在牟

第三句を略解にはイモトワトとよみ、古義にはイモトアレとよめり。中世はかなら

す妹の下にも吾の下にもトを添へていひしかどいにしへは下のトを省きてもいひしこと卷五(八九七頁)にいへる如し○四五は略解に何事有テカ紐解テネヌ事ノアルベキと譯せる如し。古義に何事ノ障アレバニヤ紐解テ相宿ズアルラムと譯せるは非なり。さて紐トクは帶を解くなり

年の戀こよひつくしてあすよりは常の如くやわがこひをらむ

年之戀今夜盡而明日從者如常哉吾戀居牟

年ノコヒは一年中の戀情なり

あはなくはけながきものをあまのかはへだてて又やわがこひをらむ
不合者氣長物乎天漢隔又哉吾戀將居

アハナクハは逢ハヌ事ハとなり

こひしけくけながきものをあふべかるよひだに君が來まさざるらむ
戀家口氣長物乎可合有夕谷君之不來益有良武

コヒシケクは戀シクアル事ハにて上二〇三九頁にコヒシクハとあるにおなじ。ヨ

ヒダニの次にイカデといふことを補ひてきくべし

ひこぼしとたなばたつめと今夜相あまのかはとに波たつなゆめ
牽牛與織女今夜相天漢門爾波立勿謹

第三句を略解古義にコヨヒアフとよみたれど二星は天河門にて相逢ふにあらねばコヨヒアフアマノカハトニとはつづけいふべからず。されば舊訓の如くコヨヒアハムとよみて今夕逢ハムニの意と見べし

秋風のふきただよはすしら雲はたなばたつめのあまつ領巾かも

秋風吹漂蕩白雲者織女之天津領巾毳

しばしばもあひみぬ君をあまのかは舟出はやせよ夜のふけぬ間
數裳相不見君矣天漢舟出速爲夜不深間

君ヲは君ナルゾとなり。集中にゾと心得べきヲあり。たとへば卷七なる

はつせ川しらゆふ花におちたぎつ瀬をさやけみと見にこし吾乎

むらさきの名高の浦の名のりその磯になびかむ時まつ吾乎

などの如し(卷九二頁八五) 参照○結句の間の字を古義にアヒダとよめり。舊訓の如く
マニとよむべし

秋風の清夕^{キヨキユフベニ}あまのかは舟こぎわたる月人をとこ

秋風之清夕天漢舟榜度月人壯子

月の歌にて七夕の歌にあらず。第二句を略解古義にサヤケキユフベとよみたれど、
さては第二句第三句結句ともに名詞どめとなりて調よからねばなほ舊訓の如く
キヨキユフベニとよむべし

あまのかは霧たちわたりひこぼしのかぢの音きこゆ夜のふけゆけば
天漢霧立度牽牛之織音所聞夜深往

君が舟今こぎくらしあまのかは霧たちわたるこの川の瀬に
君舟今撈來良之天漢霧立度此川瀬

コノ川ノセといへるは別の川にあらず。アマノ川ノコノ瀬ニとなり。古義にいへる
如く霧を舟の水烟と見なしたるならむ。卷八にも

ひこぼしのつまむかへ船こぎづらしあまのかはらに霧のたてるは
とあり

秋風に河浪たちぬしまらくは八十の舟津にみ舟とどめよ

秋風爾河浪起暫八十舟津三舟停

七夕の事はもとより本事あるにあらねば作者の心に任せてさまざまによみなせ
り。たとへば天河を渡るさまも常には對岸に渡るやうによめるを此歌にては楊子
江などの如き大河を傳ひゆくやうによめり。まづ此事を知りて此歌を見べし。○八
十ノフナ津はをちこちの泊なり。古義に「八十舟津は安之舟津にて安河なるべし」と
いへるは非なり

あまのかは川聲^{カハナド}さやけしひこぼしの秋^{アキ}こぐ船の浪のさわぎか

天漢川聲清之牽牛之秋榜船之浪蹙香

秋といふこと無用なるこゝちす。宣長は

秋は速の誤か。次下に早榜船ノカイノチルカモとあり

といへり。案ずるに敢榜の誤ならむ。卷三(四八二頁)にアヘテコギデム、卷九(一六八五頁)に敢而コギトヨム、卷十七にアヘテコギデメとありてアヘはキホヒテといふことなり。因にいふ。集中には文字の減えて分かずなれるを傍訓の殘に據りて擬て填めたるにあらざるかと思はるゝ處往々あり

あまのかは川門にたちてわがこひし君來なり紐ときまたむ

一云あまのかは河にむきたち

天漢川門立吾戀之君來奈里紐解待 一云天川河向立

卷八なる憶良の七夕歌のうちなる

あまのかはあひむきたちてむかひてわがこひし君きますなり紐ときまけな
のうつれるなり。結句の語例は上に

まけながくこふるころゆ秋風に妹音きこゆ紐ときまけな

とあり。ヒモトキマタムは襟ヲクツロゲテ待タウとなり。來を古義にはキマスとよめり

あまのかは川門にをりて年月こひし君にこよひあへるかも

天漢川門座而年月戀來君今夜會可母

第三句を舊訓にトシツキヲとよみ略解にトシツキニとよめり。時の下にはヲをそへたるもニをそへたるも共に例あれど(たとへば卷九にナガキケ爾オモヒツミコシ、卷二十にナガキケ遠マチカモコヒムとあり)ここは第四句の末のニとさしあへばトシツキヲとよむべし

あすよりはわが玉床をうちはらひきみといねずてひとりかもねむ

明日從者吾玉床乎打拂公常不宿孤可母寐

タマドコヲウチハラヒはキミトイネまでにかゝりてズまではかからず

あまのはら往射跡△しらまゆみ挽而隱在、月人をとこ

天原往射跡白檀挽而隱在月人壯子

第二句第四句を舊訓にユキテヤイルト、ヒキテカクセルとよみ、その第二句を眞淵はユクユクイムトに改め、雅澄は往を注の誤としてサシテヤイルトに改め

たり。案ずるに往を何の誤とし跡の下に香を補ひ隠を張の誤として

あまの原何をいむとかしらま弓ひきてはりたる月人をとこ

とよむべし。月を弓に譬へたる例は卷三に

あまの原ふりさけみればしらま弓はりてかけたり夜路はよけむ

とあり○月人壯子は月なり。略解に

月人ヲトコは上によめるは皆彦星の事ときこゆるを是のみ月の事とせんもい

かが也云々

といへるは評すべき辭を知らず彦星を月人男といへる事曾て無し。さて此歌は七

夕のにあらずまぎれてこゝに入れるなり

このゆふべふりくる雨はひこ星のはやくぐ船のかいの散鴨チリカモ

此夕零來雨者男星之早撈船之賀伊乃散鴨

ハヤコグといふ一の動詞にてイッギ漕グといふ意なるべし。散鴨を舊訓にチルカ

モとよめるを古義にチリカモに改めたり。權の散るにはあらで權より水の散るな

ればげにチリカモとよむべし。なほ云はばカイノチリと云へばカイヨリノ散物と

もきこゆれどカイノチルと云はむにそのノはガといふにひとしければなり

あまのかは八十瀬霧合キリヒメひこ星の時まつ船は今しこぐらし

天漢八十瀬霧合男星之時待船今榜良之

霧合は略解に従ひてキラヒメとよむべし。古義にキラヘリとよめるは語格にかな

はず。さてキラヒメはクモリヌなり。時マツ船は漕出ヅベキ時ヲ待ツ舟にてやがて

八十瀬のきらふを待ちしなり。古義には其船のかちのはじきに天河の水がみなぎ

りたちて云々』と釋せり。げに上なる

君が舟今こぎくらしあまのかは霧たちわたるこの川の瀬に

と似たる趣なれどコノ瀬ニ霧タチワタルといへると八十瀬キラフといへるとは

同一視すべからず。されば古義の説は従ひがたし

風ふきて河浪たちぬ引船にわたりも來夜オシヨ不降間爾タマヘ

風吹而河浪起引船丹度裳來夜不降間爾

ヒキフネニは引船ニテといふ事なり。卷十一にもハユマ路ニ引舟ワタシ云々とあ

り。來を從來キマセとよみたれど座の字なければキタレとよむべし。上二〇五六頁にも例あり○結句は略解に従ひてヨクダタヌマニとよむべし舊訓はヨノフケヌマニ

あまのかはとほきわたりはなけれどもきみが舟出は年にこそまで

天河遠度者無友公之舟出者年爾社候

二三いさゝか聞えがたきによりて古義は誤解し略解は黙せり。第二句はトホキワタリニハといふべきニを略せるなり。六帖と拾遺とにトホキワタリニアラネドモとあるはもとのまゝにては耳遠きによりて改めて出せるなり。ワタリは渡津なり。界限の意にあらず○年ニは一年ニ亘リテとなり

天の河うち橋わたせ妹が家ぢやまずかよはむ時またずとも

天河打橋度妹之家道不止通時不待友

三四は妹が家ヲタエズ訪ハムとなり。結句は訪フベシト定マレル時ヲ待タズトモとなり。卷十八に家持の

あまのかは橋わたせらばその上ゆもいわたらさむを秋にあらずともとあるは之を學べるなり。卷九(一七八九頁)なる七夕歌にも

久かたのあまのかはらに、かみつ瀬に、珠橋わたし云々

とあり

月かさねわがもふ妹に會夜者、今之之夕つぎこせぬかも

月累吾思妹會夜者今之七夕續巨勢奴鴨

第二句は舊訓の如くアヘルヨハとよむべし略解にはアフヨヒハとよめり○第四句を舊訓にコノナヌカノヨとよみ略解古義にはイマシナナヨヲとよめり。ツギコセヌカモはツヅケカシとなり。さて語法上ナナヨツヅケカシとは云はるれどナナヨヲツヅケカシとは云はれず。されば第四句はイマノナナノヨとよみて今夜ノ七倍ノ夜といふ意とすべし。而してナナがアマタといふことにて七に限りたる事にあらざるは古義にいへる如し

年によそふ吾舟こがむ天のかは風はふくとも浪たつなゆめ

年丹裝吾舟榜天河風者吹友浪立勿忌

年ニヨソフは一年ニ亘リテ準備スルとなり

天の河浪はたつとも吾舟はいざこぎいでむ夜のふけぬ間に

天河浪者立友吾舟者率擄出夜之不深間爾

ただこよひあひたる兒等にことどひもいまだせずしてさよぞあけにける

直今夜相有兒等爾事問母未爲而左夜曾明二來

タダコヨヒのタダはタダ今のタダなり。唯にあらず。直なり。但コヨヒにかゝれるにてアヒタルにかゝれるにあらず。古義に

タダコヨヒは今夜直に相見たるよしなり。タダは直に相見る謂なりといへるは非なり。コトドヒは談話なり

天の河しら浪たかしわがこふるきみが舟出は今しすらしも

天河白浪高吾戀公之舟出者今爲下

浪の高きは君が舟に激するならむといへるなり。上に

君が舟今こぎくらし天のかは霧たちわたるこの川の瀬に

とあると相似たる趣なり

はたもののふみ木持ゆきてあまの河うち橋度君がこむため

機鬮木持往而天河打橋度公之來爲

ハタモノは即機なり。フミ木は機の具にて機織る時足にて踏む板をいふ。契沖は「機織る者の尻打懸る板なり」といひ雅澄は之に従ひたれど尻うちかくる板を踏木といふべけむや思ふべし。○第四句を従来ウチハシワタスとよみたれどワタスといはば上をモチキテといふべく、モチユキテといはば下をワタサム又はワタセといふべし。さればこゝはワタセとよみ改むべし

天のかは霧たちのぼるたなばたの雲の衣のかへる袖かも

天漢霧立上棚幡乃雲衣能飄袖鴨

上にも

秋風のふきただよはすしら雲はたなばたつめのあまつ領巾かも
とあり

古^{イニシヘニ}おりてしはたをこのゆふべころもにぬひて君まつ吾を

古織義之八多乎此暮衣縫而君待吾乎

古は舊訓の如くイニシヘニとよむべし。夙クといふ意なり。略解にイニシヘユとよみ改めたれど語法上ユ、テシとは云はれず。さてこのハタは布帛なり。○吾ヲは吾ゾなり。上(二〇五三頁)にもシバシバモアヒ見ヌ君ヲとあり。古義に「今か今かと君をまつ吾なるものを云々」と釋せるは非なり

足玉も手珠もゆらにおるはたをきみがみけしにぬひあへむかも

足玉母手珠毛由良爾織旗乎公之御衣爾縫將堪可聞

足玉手玉は手足に纏ける玉なり。ユラニはユラユラトとなり。神代紀下一書に手玉モユラニハタオル少女とあり。○ミケシは御服なり。三四の間に君ノ來タマフマデニといふことを補ひてきくべし。ヌヒアヘムカモは縫果テムカとなり

月日えりあひてしあれば別乃^{ワカレ}をしかる君者あすさへもがも

擇月日逢義之有者別乃惜有君者明日副裳欲得

アヒテシアレバはアヒタレバにシを挿めるなり。さて此辭は別乃ヲシカルにかゝれり。七月七日ト月日ヲ擇定メテ漸ク逢ヒタルナレバとなり。○乃は久の誤なるべしと略解にいへり。げにワカレマクとあるべきなり。○君の下の者は乎などの誤ならむ。別レム事ノ惜キ君ヲ明日サヘ留メテ見ムとなり。略解に「明日も又來ませとねがふ也」と釋けるは月日エリアヒテシとあるを打消ちてよろしからず

あまのかはわたり瀬ふかみ船うけてこぎくる君がかぢの音きこゆ

天漢渡瀬深彌泛船而棹來君之楫之音所聞

棹をコギとよませたるは榜をコギとよませたるに同じ。榜はカヂにてコグは榜なるを集中には木篇なるをもコグに借りたり

あまの原ふりさけみれば天のかは霧たちわたる君は來ぬらし

天原振放見者天漢霧立渡公者來良志

略解に「下つ國にて思やりてよめる也」といへる如し。古義に織女の語とせるはキミとあるによれるならめど相對してならずとも君といひつべし。たとへば卷七に

あしひきの山つばささく八岑こえししまつ君がいはいづまかも

とあるは古人を君といへるなり。又古今集に

一とせに一たびきます君まてばやどかす人はあらじとぞおもふ

とあるは牽牛を君といへるなり。○さて今の歌は卷八なる

ひこぼしのつまむかへ船こぎづらしあまのかはらに霧のたてるは

とあると相似たる所あり

あまのかは瀬ごとに幣をたてまつるころは君をさきく來ませと

天漢瀬每幣奉情者君乎幸來座跡

二三の句、瀬每幣奉とかけるを古義に瀬の上に渡の字を補ひてワタリセゴトニヌサマツルとよみたれどもとのまゝにて可なり。さてタマツルにて切らずしてタマツルココロハとつづけて心得べく又結句の次にナリを添へて心得べし。○ココロハはワケハとなり。君ヲは君ヨなり。○卷三四〇一頁なる

佐保すぎて寧樂のたむけにおくぬさは妹を目かれずあひみしめとぞと相似たり

(久方の)あまの河津に舟うけて君まつ夜らは不明毛あらぬか

久方之天河津爾舟泛而君待夜等者不明毛有寐鹿

七夕の歌は各人意の趣くまゝによみたれば其趣さままなれど織女が舟を浮べて牽牛を待つ趣によめるはめづらし。○夜ラのラは妹ラなどのラにおなじくて助辭なり。結句は字のまゝならば前註の如くアケズモとよむべけれどおそらくは明は深の誤ならむ。さらばフケズモとよむべし。さてフケズモアラヌカは更ケズモアレカシとなり

天の河足沾わたり君が手もいまだまかねば夜のふけぬらく

天河足沾渡君之手毛未枕者夜之深去良久

足沾は舊訓に従ひてアシヌレとよむべし。略解にはアヌラシに改めたり。足ヌレテ天ノ河ヲ渡リとなり。徒渉する趣なり。○マカネバは枕カヌニ、フケヌラクは更ケヌ

ル事ヨとなり

わたり守船わたせをとよぶこゑのいたらねばかも梶カヂ之ノ聲セ不セ爲ス

渡守船度世乎跡呼音之不至者疑梶之聲不爲

渡船にて牽牛の渡るさまによめるなり。四五は渡守ノ耳ニ届カヌト見エテ舟ヲ出ス音ガキコエヌとなり。卷七(一二六六頁)にも

うち河を船わたせをとよばへどもきこえざるらしかちの音もせぬとあり。これらのヲを古義に

度せ叫ヲ々と呼聲なり。集中に叫字をヲの假字に用たるは其意なり

といひ訓義辨證(下卷八三頁)にも呼音としたれどなほ略解に「ワタセヲはワタセヨといふにひとし」といへるに従ふべし。ワタリ守ヲトヨベドモなどあらばこそ古義辨證の説の如くには心得め○結句を従來カヂノオトセヌとよみたれど元暦校本及類聚古集に梶聲之不爲とあるに従ひてカヂノトノセヌとよむべしまけながく河にむきたちありし袖今夜ヨヒ卷跡マカト△念モト之ガ吉沙

眞氣長河向立有之袖今夜卷跡念之吉沙

アリシ袖はアリシ人ノ袖ヲとなり。四五を舊訓にコヨヒマカトオモヘルガヨサとよめり。オモヘルといふべからざる事はいふまでもなし。略解にはコヨヒマキナム、トオモフガヨサとよみ古義にはコヨヒマカレム、トオモフガヨサとよめり。案ずるに念の上に下の字を補ひてコヨヒマカトシタ念モフガヨサとよむべし。シタモフは心ニ思フなり

天のかはわたりせごとにおもひつつこしくもしるしあへらくおもへば

天漢渡湍每思乍來之雲知師逢有久念者

オモヒツツは君ヲ思ヒツツなり。アヘラクはカク逢ヘル事ヲとなり。コシクモシルシは來シ詮アリとなり。卷八に

秋の野のをばながうれをおしなべてこしくもしるくあへる君かも

又卷九に

見まくほりこしくもしるく吉野川おとのさやけさみるにともしくとあり

人さへや見つがずあらむひこぼしのつまよぶ舟のちかづきゆくを

一云見つつあるらむ

人左倍也見不繼將有牽牛之孀喚舟之近附往乎 一云見乍有良武

こは牽牛が舟にて織女を迎へ歸りて寝る趣によめるなり。卷八(一五六四頁)にもヒコボシノツマムカへ船とよめり。さて初二は織女ハ勿論傍人サへマモリ見ザラムヤとなり。初句のヤを第二句の下へまはして心得べし

天のかは瀬をはやみかもぬばたまの夜はふけにつつあはぬひこぼし
天漢瀬乎早鴨烏珠之夜者闌爾乍不合牽牛

アハヌは來リ逢ハヌとなり

わたり守舟はやわたせ一とせにふたたびかよふ君ならなくに

渡守舟早渡世一年爾二遍往來君爾有勿久爾

上にも

しばしばもあひ見ぬ君をあまのかはふなではやせよ夜のふけぬまにとあり

(玉かづら)たえぬものからさぬらくは年のわたりにただ一夜のみ

玉葛不絶物可良佐宿者年之度爾直一夜耳

妹背ノ契ハ絶エヌモノナガラとなり。サヌラクハは寝ル事ハといふ事トシノワタ

リニは一年經過スルウチニといふ事なり

こふる日はけながきものをこよひだにともしむべしや可相物乎

戀日者氣長物乎今夜谷令乏應哉可相物乎

上(二〇三九頁)に

こひしくはけながきものを今△谷△谷ともしむべしやあふべき夜だに

といふ歌あり。それのうつれるなり。さて今の歌は結句アフベキモノヲとありてはとゝのはず。案ずるにもと可相夜谷とありて第三句と結句と末の二字齊しかりし

を誤りて第二句の末と齊しと見て物乎と寫し誤れるならむ

たなばたのこよひあひなば常のごと明日乎阻而年者將長

織女之今夜相奈婆如常明日乎阻而年者將長

四五を從來アスヲヘダテトシハナガケムとよめり。さて略解に

明日の一日をへだて、それより末の長からんといふ也

といひ古義に

又明日を隔にして今來む年の今夜まであふべからねば一年の月日長く來し方の如く戀しく思ひつゝあらむぞとなり

といへり。明後日再逢はむものならばこそアスヲヘダテテといはめ。案ずるに明日乎阻而は明日者阻而の誤としてアスハヘナリテとよむべし。即明日カラハ離レテとなり。又年者將長は年乎將度の誤としてトシヲワタラムとよむべし。されば乎と者と入りかはり又度の長にうつれるなり

あまのかは棚橋わたせたなばたのいわたらさむにたな橋わたせ

天漢棚橋渡織女之伊渡左牟爾棚橋渡

こは織女の方よりかよふ趣によめるなり

天のかは河門八十ありいづくにか君がみ船をわがまちをらむ

天漢河門八十有何爾可君之三船乎吾待將居

河門は河の狭くなりて渡るに便よき處なり。即渡瀬なり。雅澄が湊と認めて

天河の湊は八十と數多くあればいづれの湊に夫、君が御船のはてたまはむもしるべからず

と釋けるはいみじき誤なり

秋風のふきにし日より天のかは瀬爾出立まつとつげこそ

秋風乃吹西日從天漢瀬爾出立待登告許曾

瀬とある穩ならず古義に河の字を補ひてカハセニデタチとよみたれど穩ならざるは河瀬にてもかはることなし。おそらくはもと濱とありしを河に濱といはむこといかがと思ひて傳寫の際に改めしならむ。河に濱といへる例はたとへば卷九二

八〇五頁なる鹿島郡荊野橋別大伴卿歌に

みふねいでなば濱もせに、おくれなみゐて、こいまろび、こひかもをらむ云々とあり

あまのかはこぞのわたりせ有^{ウセ}二^ニ家里^リ君が將來^{キタラユ}道のしらなく

天漢去年之渡湍有二家里君將來道乃不知久

第三句を舊訓にアレニケリとよめり。略解には

有を荒に借たるはいぶかし。絶の草書より誤〇れるにてタエニケリならん

といひ古義は之に従へり。案ずるに荒を有とかくべからざるはいふ迄もなし。又渡瀬に荒、絶などいはむも穩ならず。おそらくは失とありしを有に誤れるならむ。さて上にもアマノカハコゾノワタリノウツロヘバとあり〇ミチノシラナクは道ノ知ラレヌ事ヨとなり

天のかは湍^セ瀬^ノ爾^ニ白^シ波^ナ、高^{タカ}けどもただわたりきぬ待^マ者^ノ苦^ク三

天漢湍瀬爾白浪雖高直渡來沼待者苦三

第二句を從來セゼニシラナミとよみたれどセゼノシラナミとよむべし。爾をノとよむべき處又は乃などの誤とすべき處集中に少からず(四九六頁及五六八頁参照)〇タダワタリキヌはカマハズニ渡ツテ來タとなり〇結句は古義に従ひてマタバクルシミとよむべし。上二〇三一頁なるミズバクルシミと同例なり。さてマタバクルシミは白浪ノ和ギナムヲ待タバワビシカルベキニヨリテとなり。略解に待は織女のむかへ來るを待也

といひ古義に

これは彦星の妻迎舟を遣て織女を待に堪がたくて自渡り來しといへるにやといへる共に非なり

ひこぼしのつまよぶ舟の引綱のたえむと君をわがおもはなくに
牽牛之孀喚舟之引綱乃將絶跡君乎吾念勿國

上三句は序なり。こゝの引綱は舟をひきのぼる綱手にて上二〇五九頁に引舟ニワタリモ來タレといへるとは異ならむ〇四五は君ガ絶エムトハ信ゼズといへるなり。古義に

いつまでも君と契の絶えむとわが思ひはせぬことなるを末長くたのもしくおぼしたまへ

と釋せるは誤解なり。此説の如くならば君トタエムトワガオモハナクニとこそいふべけれ。さて此歌は寄七夕戀歌にて七夕を詠せるにはあらず。ヒコボシノツマヨブ舟ノといへる、織女の語調にあらざればなり

わたり守舟出爲將出こよひのみあひみて後はあはじめものかも

渡守舟出爲將出今夜耳相見而後不_レ相物可_レ毛

第二句は略解に一本に據りて出を去に改めてフナデシイナムとよめるに従ふべし。古義に出を來に改めてフナデシテコムとよめるはわろし。一首の意は

渡守ヨナゴリ惜ケレドイザ舟出ヲシテ去ナム、今夜相見テ後ニハアハザラムモノカハ、否後ニモ逢フベケレバ

といへるなり

わがかくせるかぢ棹なくてわたり守舟將惜八方しはしはありまで

吾隱有楫棹無而渡守舟將惜八方須臾者有待

前の歌の和歌なり。第四句の惜は諸本に借とあり。出の誤ならざるか

あめつちの はじめの時ゆ あまの河 いむかひをりて 一とせに
ふたたび不_レ遭 妻戀に 物おもふ人』あまのかは やすのかはらの
ありがよふ 出出のわたりに 具穗船の ともにもへにも ふなよ
そひ 眞梶しじぬき』旗荒本葉裳具世爾 秋風の ふきくるよひに
あまの川 白浪しぬぎ おちたぎつ はやせわたりて (わか草の)
妻手まかむと (大船の) おもひたのみて こぎくらむ そのつまの
子が (あらたまの) 年のを長く おもひこし 戀將盡 ふみ月の
なぬかのよひは われもかなしも

乾坤之初時從天漢射向居而一年丹兩遍不_レ遭妻戀爾物念人天漢安乃川
原乃有通出出乃渡丹具穗船乃艦丹裳舳丹裳船裝眞梶繁拔旗荒本葉裳
具世丹秋風乃吹來夕丹天川白浪凌落沸速湍涉稚草乃妻手枕迹大船乃

思憑而撈來等六其夫乃子我荒珠乃年緒長思來之戀將盡七月七日之夕者吾毛悲鳥

此歌を一讀してまづ心づくは三度までアマノカハといへる事なり。是一般にはあるまじき事なり。次に句を逐ひて細に觀るに第八句にモノオモフ人といひ放ちて下に之を受くる辭なし。又具穗船ノトモニモ舳ニモフナヨソヒ眞梶シジヌキといへるは大船の趣なるにアマノ川シラ浪シヌギオチタギツハヤセワタリテといへるは小舟の調なり。よりにて思ふに此歌はもと三首なりしが混じて一首となれるにて第一首と第二首とは共に第九句以下の失せたるなり

あめつちの はじめの時ゆ あまの河 いむかひをりて 一とせに
ふたたび不遭 妻戀に 物おもふ人

不遭を從來アハヌとよみてツマゴヒニつづけたるはわろし。アハズとよむべし
あまのかは やすのかはらの ありがよふ 出出のわたりに 具穗
船の ともにも舳にも ふなよそひ 眞梶しじぬき

略解に「出出は歳の字の誤にてトシノワタリなり」といひ古義にも之に従ひたれど、ヤスノカハラ乃とあるを受けたればワタリは渡津の意ならではかなはず。従ひて出出は歳の誤とは認むべからず。案ずるに出出は世世の誤にて世々アリガヨフワタリといふべきをかくいへるにあらざるか。○具の字一本に其とありといふ。さればソホブネとよむべし。はやく宣長は其の誤ならむといへり。ソホは又ソホニ又單にニといふ。赤色の土なり。ソホブネは其土もて塗れる船なり。卷三(三七九頁)にアケソソホブネとあり。卷九(二八〇五頁)にサニヌリノ小船とあるもおなじ。フナヨソヒは船装シテを略せるなり

旗荒本葉裳具世爾 秋風の ふきくるよひに あまの川 白浪しぬ
ぎ おちたぎつ はやせわたりて (わか草の) 妻手まかむと (大船
の) おもひたのみて こぎくらむ そのつまの子が (あらたまの)
年のを長く おもひこし 戀將盡 ふみ月の なぬかのよひは わ
れもかなしも

具は一本に其とあるに従ふべし。略解には旗荒の荒を萩の誤としてハタススキモトハモソヨニとよみ古義には本を木の誤として上に附け又其下に末の字を補ひてハタススキウラバモソヨニとよめり。宜しく荒を芒の誤本を末の誤とすべし。荒をススとはよみがたければなり(はやく考にも訓義辨證 六頁 二にも荒を芒の誤とせり)○妻手枕迹を略解にツマガテマカトとよめるを古義に手を乎の誤としてツマヲマカトとよめり。古義に従ふべし。オモヒタノミテは妻を思頼むなり。コギクラムは漕行クラムといはむにおなじ。ツマノ子は夫の子にて牽牛なり○戀將盡を略解古義にコヒツクスラムとよみたれど上にコギクラムとありて今方に漕行く趣なれば戀を盡す事は未來なり(反歌にも得行而ハテム河津シオモホユとありて船泊つる事を未來にいへり)さればコヒヲツクサムとよむべし。語例は上(二〇四七頁)にも戀モツキネバまた(二〇五二頁)年ノ戀コヨヒツクシテとあり○ワレといへるは作者なり

反歌

(こま錦)紐ときかはし天人の妻どふよひぞわれもしぬばむ

狛錦紐解易之天人乃妻問夕叙吾裳將偲

コマニシキは枕辭なり。初は高麗錦の紐といふ意にてコマニシキ紐とつづけしにもあるべけれど後には無意義の枕辭となれるなり○天人は無論彦星の事なれど舊訓に直にヒコボシとよめるは作者の趣味を没却したり。宜しく契沖に従ひてアメビトとよむべし。アメビトは卷十八に安米比度と假字書にせる例あり。古今集以後にはアマビトといへり○略解に卷三なるシヅハタノ帯解替而を例に引きたれど彼と此と同趣ならざる事は彼卷(五二七頁以下)にいへる如し

彦星の川瀬をわたるさを舟の得行而はてむ河津しおもほゆ

彦星之川瀬渡左小舟乃得行而將泊河津石所念

サ小舟のサは添辭なり。サとヲと二つの辭を添へたるはサヲシカと同例なり。得行而を契沖以下エユキテとよめれど得は伊の誤ならむ

天地と わかれし時ゆ (久方の) あまつしるしと 亘てし 天の河原に (あらたまの) 月をかさねて 妹爾相 時さもらふと たちま

つに わが衣手に 秋風の 吹反者 立坐 たどきをしらに (村肝
 の) 心不△欲△ (とき衣の) おもひみだれて いつしかと わがま
 つこよひ 此川の 行△長 有△得鴨

天地跡別之時從久方乃天驗常亘大王天之河原爾璞月累而妹爾相時侯
 跡立待爾吾衣手爾秋風之吹反者立坐多土伎乎不知村肝心不欲解衣思
 亂而何時跡吾待今夜此川行長有得鴨

アマツシルシは上二〇三二頁に見えたり。ここより越ゆなといふしるしなり。〇亘
 は略解に定の誤としてサダメとよめる如し。元暦校本及類聚古集にも定とあり。〇
 月ヲカサネテはタチマツニにかゝれるなり。〇妹爾相時サモラフト 略解古義に
 イモニアフとよみたれどイモニアハムとよむべし。サモラフはウカガフにてやが
 てマツなり。〇吹反者は古義にフキシカヘレバとよめるに従ふべし。略解にはフキ
 カヘラヘバとよめり。秋風のくりかへし衣手を吹くなり。卷一軍王見山作歌(一二頁)
 にも

山こす風乃ひとりをる、わが衣手爾、あさよひに、かへらひぬれば

とあり。〇立坐を舊訓と略解とにはタチテキテとよみ古義にはタチテキルとよめ
 り。宜しくタチテキムとよむべし。タドキラシラニはセムスベヲ知ラズとなり。卷十
 二に立而居スベノタドキモ今ハナシまた立居タドキモシラニとあり。〇心不欲
 宣長は欲を歡の誤としてココロサブシクとよみ、雅澄は卷三四六〇頁に雲居奈須
 心射左欲比とあるに據りて字を補ひて心不知欲比としてココロイサヨヒとよめ
 り。古義の説に従ふべし。ココロイサヨヒは心シヅマラズなり。〇ワガマツコヨヒの
 マツは待チシの意と見べし。〇行長有得鴨 略解に行々不有得鴨の誤としてユク
 ラユクラニアリガテヌカモとよみ試み、古義には字を補ひて行瀬長有欲得鴨とし
 てユクセノナガクアリコセヌカモとよめり。これも古義の説に従ふべし。今夜ガ此
 天ノ川ノ瀬ノヤウニ長クアツテクレヨカシといへるなり

反歌

妹爾相時かたまつと(久方の)あまのかはらに月ぞへにける
 妹爾相時片待跡久方乃天之漢原爾月叙經來

初句はイモニアハムとよむべし從來イモニアフとよめり

詠花

さをしかの心あひおもふあきはぎのしぐれのふるに落僧惜毛
竿志鹿之心相念秋芽子之鐘禮零丹落僧惜毛

ココロアヒオモフは心ニ相念フのニをはぶけるなり。本集の歌には後世ならば省くべからざるニを省ける例少からず。たとへば山ニ片就キテ、島ニ隠リ、心ニ戀ヒを山カタツキテ、島ガクリ、ウラゴヒといへるそのニは後世ならば皆省くべからざるなり。心アヒオモフといへるも然り。○結句の僧を略解には俱の誤としてチラマクとよみ、古義には信の誤としてチラクシとよみ、字音辨證(下卷五三頁)には僧にシの音ありといひてもとのまゝにてチラクシとよめり。卷四(七四八頁)にシルシモナシトのシルシを知僧とかけり。されば辨證の説に従ふべし。但師と書くべきを僧と書けるにて一種の義訓なるべし

ゆふされば野邊の秋はぎうらわかみ露枯金待難

夕去野邊秋芽子末若露枯金待難

右二首柿本朝臣人麿之詞集出

ウラワカミは末若とは書きたれどウラワカミネヨゲニミユルワカ草ヲなどのウ
ラワカミにてただワカサニといふことなり。○四五を宣長は(枯を沾の誤として)ツ
ユニヌレツツとよみ、略解にツユニシヲレテアキマチガテヌとよみ、古義にツユニ
カレツツアキマチガタシとよめり。宜しく枯を折の誤としてツユニゾラルアキ
マチガテニとよむべし。すなはちマダ若ク弱キニヨリテ秋マチアヘズ露ニゾ折ル
ルとなり

まくず原なびく秋風ふくごとにあだの大野のはぎが花ちる

眞葛原名引秋風吹毎阿太乃大野之芽子花散

古義に『このナビクもナビカスの意なり』といへるは非なり。眞葛原ガナビクとなり。

阿太は大和國宇智郡にありて吉野川に跨れり

かりがねの來なかむ日まで見つつあらむ此はぎ原に雨なふりそね

鴈鳴之來喧牟日及見乍將有此芽子原爾雨勿零根

三四は相續けるなり。さて上三句は契沖等がいへる如く雁の來る頃には萩の散るものと定めていへるなり。下にその趣によめる歌多し。古義に雁が來ナカバ雁ニ心ヲウツシテナグサムベキナレド云々と釋けるはいみじき誤なり

奥山にすむとふしかのよひさらず妻とふはぎのちらまくをしも

奥山爾住云男鹿之初夜不去妻問芽子之散久惜裳

ヨヒサラズは毎夜なり。ヨヒをこゝに初夜とかけるは一種の借字なり(集中にヨヒといへるに初夜の意なると、ただ夜の意なるとあり)○第四句はやゝまぎらはしけれど萩ノモトニ來テ妻ヲ問フなり。さればトフのトはすみて唱ふべくツマドフとは濁るべからず。後世には萩を鹿の妻とよめる歌あれど本集にはさる歌なし(卷九

三一八二 参照)

しら露のおかまくをしみ秋はぎを折耳折而おきやからさむ

白露乃置卷借秋芽子乎折耳折而置哉枯

第四句を舊訓には字のまゝにてヲリノミヲリテとよめり。さて略解に釋して

露にしをれ枯るををしみて折て置て枯さんといふ也

といへるを古義には而を六又は无の誤としてヲリノミヲラムとよみ、オキヤカラサムをソノママニ置キテ枯レシメムヤハの意とせり。案ずるに古義の説の如くならばヲリノミとはいふべからず。露ノオキテ折レナムガヲシサニタヲリノミハシツレドサテ花ノ命ヲ保タムスベナケレバ遂ニオキ枯サムカ嗚呼といふ意なり。ヲリノミヲリテは折ノミシテとなり。略解に「露にしをれかるゝを」といへれど露の爲に萩のかるゝことは無し

秋田かるかり廬の宿にほふまでさける秋はぎみれどあかぬかも

秋田菊借廬之宿爾穗經及咲有秋芽子雖見不飽香聞

宿を從來ヤドリとよみたれど屋舎はヤドとこそいへヤドリとはいはねば辭を添へてヤドノとよむべし。ニホフはそまる事なり。古義に「花の色にひかりかがやくまで」といへるは歌に合せたる釋なり

吾衣すれるにはあらず高松の野邊行之△者はぎのすれるぞ